

富山県魚津市

本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書

本江 B 遺跡  
丸 塚  
灰 塚

1986

魚津市教育委員会

## 序

近年地方都市におきましても、市史編纂等がさかんにおこなわれており、郷土の歴史に対する関心が非常に高くなっています。ところが、地域史では古代、中世に関する資料が乏しく、特に社会史の面で研究が困難な状況に直面している場合が多いが、幸い魚津市では従来より知られていた著名な縄文時代の遺跡の他に、古代・中世の遺跡の発見も増えており、文献の欠落部分を補っています。

本江B遺跡は、国道8号線バイパスの建設に先立ち発掘調査を実施しましたが、縄文時代より、江戸時代まで続く複合遺跡であることが判明し、本江地区の歴史で今まで不明だった部分が明らかにされました。今回の調査で遺跡の範囲が予想以上に広大であることも判明しており、今後の保護対策を再検討する必要があると思われます。

最後に、本江B遺跡で発見された縄文時代の住居跡は、建設省の好意により盛土保存させていただくことになり、文化財保護に協力して下さいました建設省富山工事事務所の関係者に謝意を表します。

昭和61年2月

魚津市教育委員会

## 例　　言

1. 本報告書は、国道8号線魚津バイパスの建設に関連して行われた魚津市本江字ヤチヤンタンに所在する本江B遺跡の発掘調査の調査成果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、建設省北陸地方建設局富山工事事務所と富山県教育委員会、魚津市教育委員会が協議のうえ、魚津市教育委員会がおこなった。
3. 発掘調査は、社会教育課学芸員麻柄一志が担当し、発掘調査から報告書作成まで魚津市文化財調査委員広田寿三郎氏の助言と指導を得ている。
4. 発掘調査は、昭和59年11月20日から12月4日まで、遺跡の範囲確認のための試掘調査をおこない、それにもとづき昭和60年5月13日から8月7日まで記録保存のための調査をおこなった。発掘調査終了後、昭和61年2月28日まで室内整理をおこなった。
5. 発掘調査は、作業員の手掘りでおこない、ローム層上面まで掘り下げている。ただし、昭和40年代に調査整備が実施されている第2地点では、試掘調査の結果に基づき、盛土工事がおこなわれていることが判明している地区は、盛土部分を重機により除去した。
6. 遺物整理は魚津市立歴史民俗資料館と社会教育課分室でおこない、遺物の実測、遺物・遺構のトレス、写真撮影は川口賀代子、坂本恵子、米沢理智子、麻柄幸子の協力を得ている。
7. 調査期間中ならびに報告書の作成にあたり、下記のかたがたに指導、協力をいただいた。謝意を表したい。

富山県埋蔵文化財センター 久々忠義 斎藤 隆 岸本雅敏  
山本雅敏 関 清  
黒部市教育委員会 桜井隆夫  
洗足学園魚津短期大学 辰沢速夫

## I 調査の経緯

魚津市の市街地東側を通過する国道8号線は、近年の交通量の増大からラッシュ時における交通渋滞が著しく、建設省では市街地を迂回するバイパスの建設を計画していた。この計画が公表され、建設省富山工事事務所では、昭和56年にバイパス建設予定路線内における埋蔵文化財包蔵地の有無を富山県教育委員会に照会した。これを受けて富山県埋蔵文化財センター、建設省富山工事事務所、魚津市教育委員会の三者で協議を重ね、国道8号線魚津バイパス建設予定地周辺の埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査をおこなうこととし、昭和57年度国庫補助事業として、魚津市教育委員会が実施することになった。

魚津市教育委員会では昭和57年7~8月、昭和58年1月、3月の三期にわたり、踏査と工事現場における立会いを中心とした遺跡分布調査をおこなった(魚津市教委 1978)。

この分布調査で、本江B遺跡他1遺跡がバイパス建設予定路線内に含まれることが判明したが、遺跡の規模、内容等は不明であった。

本江B遺跡は、昭和40年頃谷を挟んで向いあう本江A遺跡が市営グランド造成工事のため破壊され、豊富な遺物が散乱したために、中学生、高校生等によってさかんに遺物の採集がおこなわれた際に偶然遺物が採集され遺跡として認識された。

昭和47年に発行された遺跡分布調査報告(魚津市教委 1972)では本江B遺跡として登載され、谷に面した約300mの狭い範囲が遺跡と考えられていた。

昭和59年に建設省富山工事事務所より富山県教育委員会に、昭和60年工事着工予定地の試掘調査の依頼が出されたが、富山県埋蔵文化財センターの年間調査予定に含まれておらず、対応できなかったため、魚津市教育委員会が調査を実施した。

試掘調査は昭和59年11月20日から12月4日までおこない、従来から知られていた谷に面している地点より縄文時代の土器・石器が出土した。さらにその南側からも縄文土器、珠洲鏡が出土し、遺跡の範囲が当初の予想に反し、約2,000~3,000m<sup>2</sup>に及ぶことが判明した。このうち道路建設予定地に含まれる約1,200m<sup>2</sup>が記録保存として調査する必要が生じた。

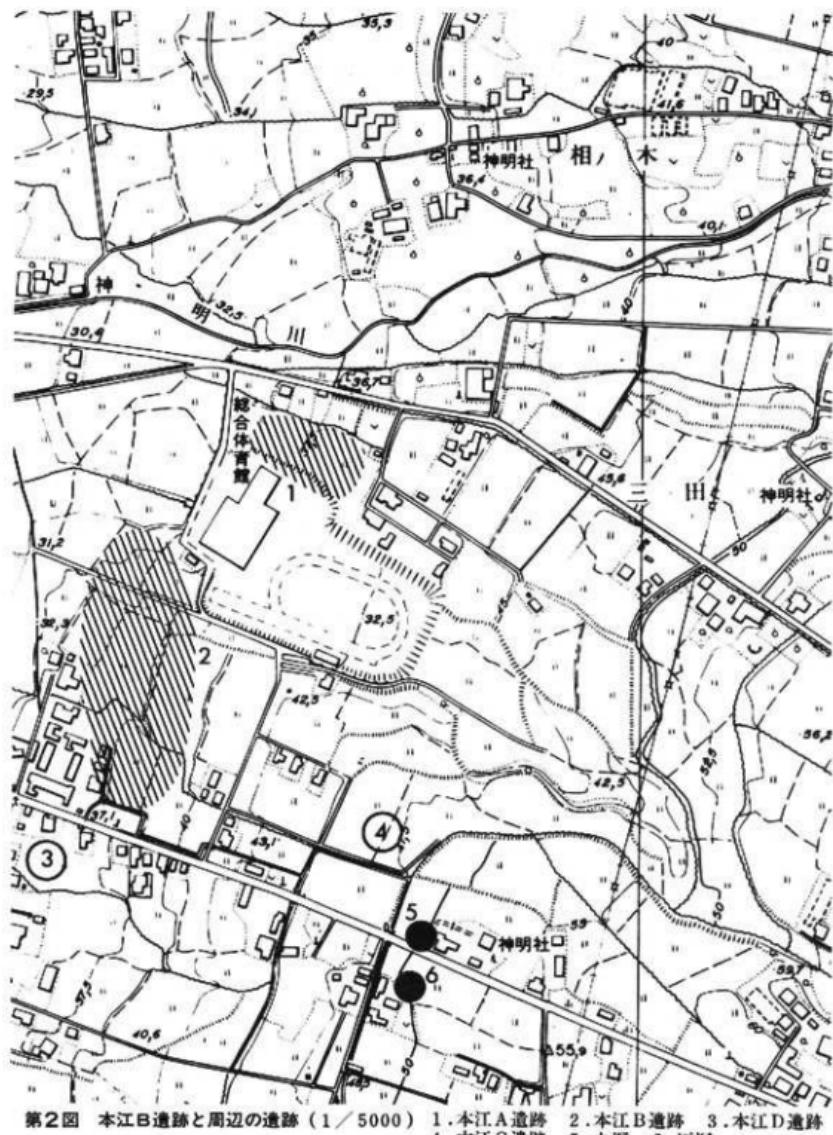
試掘調査の結果を踏まえて、富山県埋蔵文化財センターで調査員の確保ができないため、魚津市教育委員会が昭和60年度に2次調査を実施することになった。発掘調査は昭和60年5月13日から8月7日まで実施した。

発掘調査では、従来より本江B遺跡として知られていた地点を第1地点、試掘調査で発見された地点を第2地点、さらに今回の発掘調査中に新たに遺物の散布が認められた第2地点の南側一帯を第3地点と名付けた。

第1地点と第2地点は、記録保存のための発掘調査を行なったが、第3地点は試掘調査の結果、包含層がすべて擾乱されていることが判明したため、全面調査は行なっていない。



第1図 本江B遺跡の位置(1/50000)



## II 位置と環境

本江B遺跡は、魚津市のはば中央部に位置する片貝川と角川に挟まれた野方台地と呼ばれる洪積台地の末端部に位置する。

野方台地は南北約2km東西約5kmの開析扇状地で片貝川によって形成された6面の段丘面が認められる。標高は第1期で2百数10m、第6期で約10mを測る。本江B遺跡は第5期(石垣面)の開析扇状地の末端に位置している。石垣面には坊田川が流れおり石垣面の末端でヤチンタン(八津谷)と呼ばれる深い谷を刻んでいる。このヤチンタンに面して本江A遺跡(第1図2)と本江B遺跡(第1図1)が対峙している。

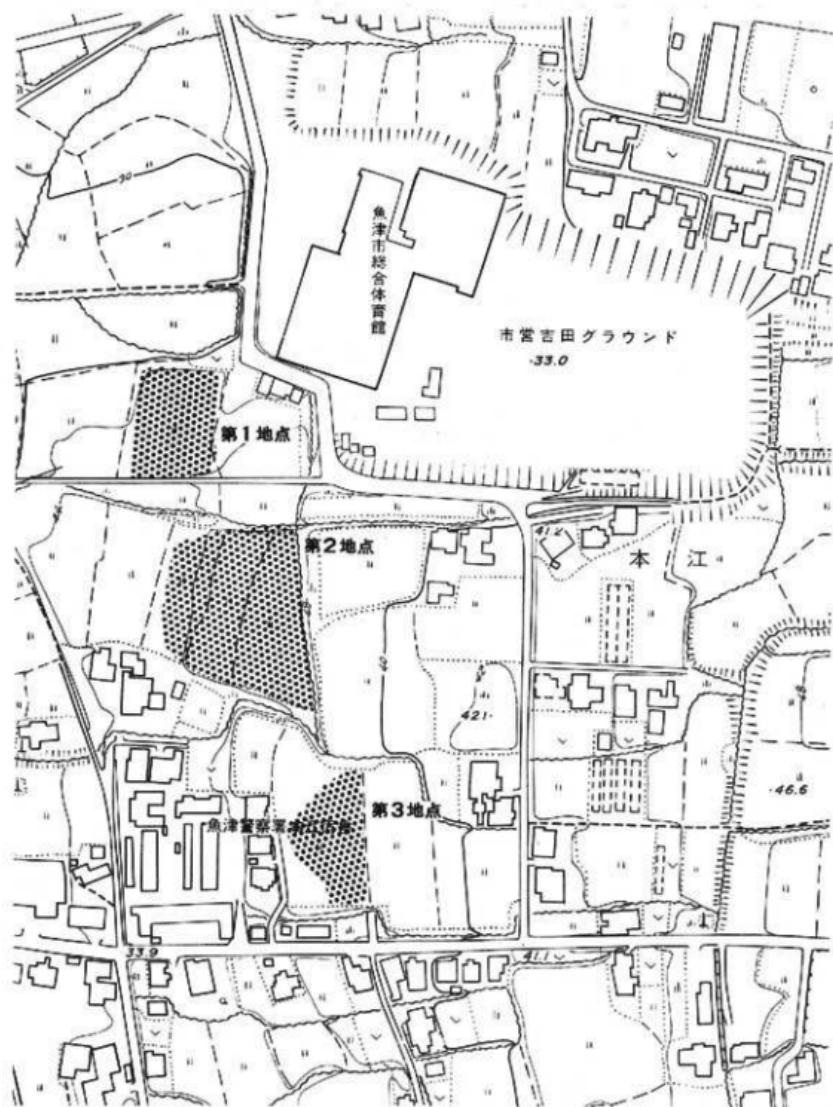
野方台地上の遺跡としては縄文時代では本江A遺跡のかに石垣遺跡(第1図6〔魚津市教委1972、富山県教委1971〕)、印田遺跡(第1図3)、大光寺遺跡(第1図4〔魚津市教委1967〕)などがある。このうち石垣遺跡と大光寺遺跡は縄文時代中期の拠点的集落である。印田遺跡は広い面積が調査され遺物は調査範囲全域から点々と出土しているが、遺構としては晚期後葉の堅穴住居跡が1棟検出されたのみである。野方台地のはば中央部に位置している印田遺跡は、生産活動の場であったと考えられる。このようなほとんど遺構を伴わない小規模な遺跡は野方台地では数多くみられる。たとえば丸塚の表土から縄文土器片、打製石斧が採集されており、また本江神明社付近からも縄文土器片等が採集されている。台地中央部では、一般的な遺跡のあり方といえよう。これに対して拠点的な集落はいずれも谷に面した台地縁辺部に立地している。

野方台地に縄文時代以後人間の居住が認められるのは古墳時代中期のことであるが、印田遺跡で住居跡が発見されている。また友道遺跡(第1図5)では古墳時代後期の須恵器が採集されており、奈良時代まで存続するこの地域での中核的な遺跡である。

平安時代の状況は明確ではないが、中世では本江地区の広い範囲で珠洲系陶器の破片がみられ、また石垣遺跡でも墓地が確認されるなど台地中央部に点々と集落が成立したことがうかがえる。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	文献
第1図1	本江B遺跡	縄文前～後、奈良～中世	
第1図2	本江A遺跡	縄文後、晩	
第1図3	印田遺跡	縄文中～晩、古墳中	魚津市教委1980
第1図4	大光寺遺跡	縄文前、中	魚津市教委1967
第1図5	友道遺跡	古墳後～奈良	広田1985
第1図6	石垣遺跡	縄文中～晩	魚津市教委1972 富山県教委1971
第1図7	石垣平A遺跡	縄文	



第3図 本江町遺跡の範囲 (1 / 2500)

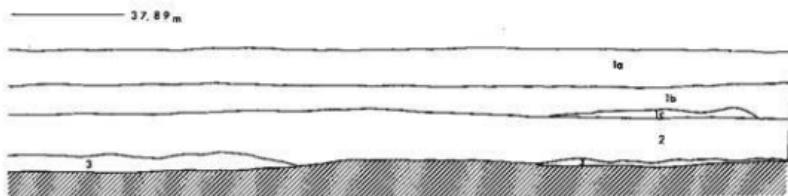
番号	遺跡名	時期	文献
第1図 8	石垣平B遺跡	旧石器、縄文	
第1図 9	湯上B遺跡	古墳初~前	富山県教委1982
第1図 10	佐伯遺跡	縄文前~中、古墳初、奈良 平安	富山県教委1979 魚津市教委1981
第1図 11	早月上野遺跡	旧石器、縄文中~晚 奈良・平安、中世	富山県教委1976 魚津市教委1982 1983
第1図 12	東尾崎遺跡	縄文後	
第1図 13	天神野新A遺跡	縄文中	
第1図 14	蛇田遺跡	縄文	
第1図 15	天神山遺跡	縄文中	富山県教委他1959
第1図 16	天神山城遺跡	古墳初、中世	麻柄1983
第2図 3	本江D遺跡	中世	
第2図 4	本江C遺跡	中世	
第2図 5	丸塚	中世	
第2図 6	灰塚	中世	

### III 層位

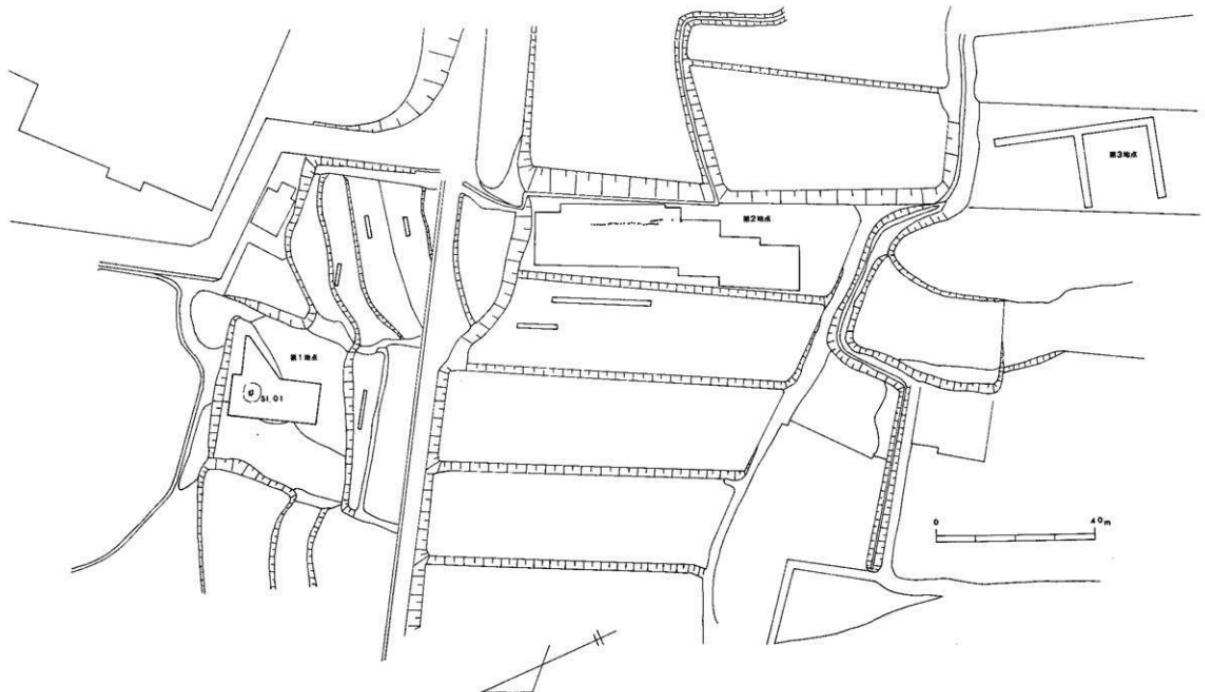
本江B遺跡は3地点に分かれているが第1地点と第2地点の基本的な層位はおおむね一致している。第5図に第2地点の中央部での東西セクションを示したが上から1a層〔暗褐色砂質土層=耕土〕、1b層〔暗褐色粘質土層(ローム小ブロック混り)=圃場整備での整地層〕、1c層〔暗黄褐色粘質土層=ローム層二次堆積〕、2層〔黒褐色粘質土層(遺物包含層)〕、3層〔暗褐色粘質土層(漸移層)〕、4層〔褐色粘土層(ローム層)〕の順で堆積している。第2地点は圃場整備がおこなわれているため耕土の下にロームの再堆積層、ロームを含む整地層がみられる。第1地点は圃場整備がおこなわれておらず、1b、1c層はみられない。第1地点は表土からローム層上面までの堆積土が厚く、1mを越える。また2層は色調によって2分することができる。

第3地点は、擾乱が著しく、プライマリーな状態で発見された遺物はない。ローム層も近年の土取りでかなり掘り込みがみられる。近代における櫻土取りのためであろう。

第1地点、第2地点では遺物は2層を中心に1a層まで出土している。1a~1c層には近代の陶



第4図 層位（第2地点中央部東西セクション） 1 / 20



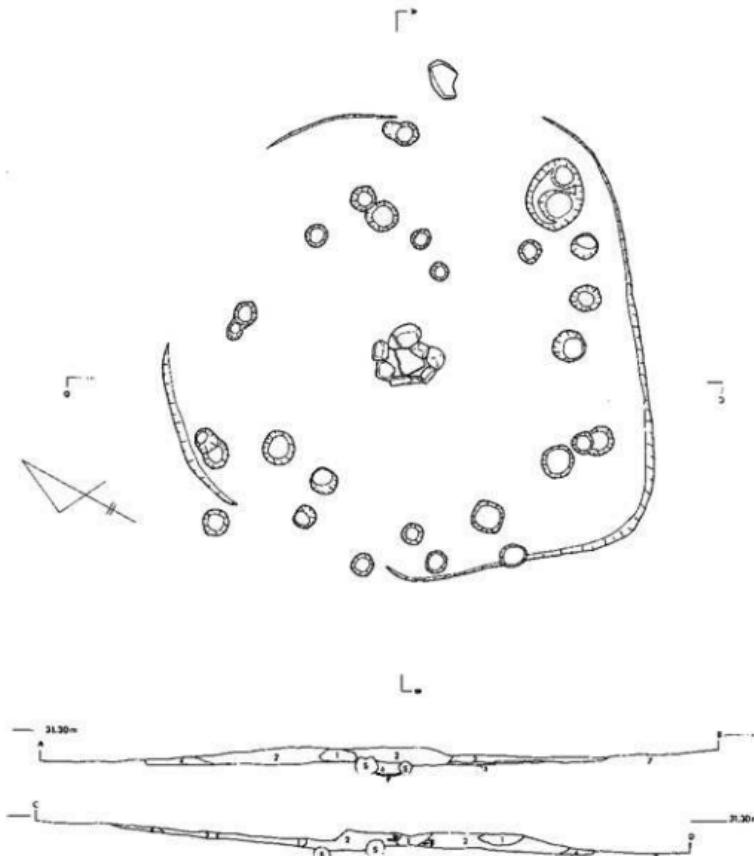
第5図 発掘区と造構 (1/1000)

磁器も含まれているが2層からは縄文土器、石器、須恵器、中世陶磁器以外のものは出土していない。遺構はいずれもローム層上面で検出されており2層中では確認できなかった。

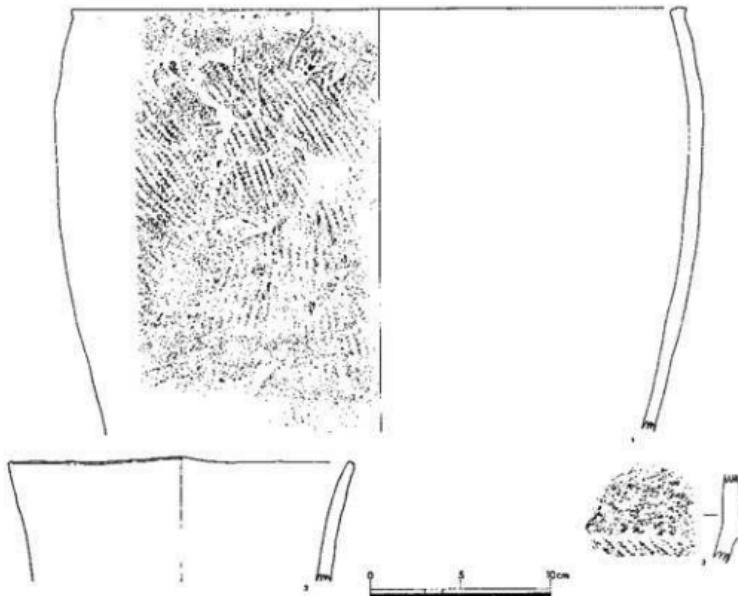
## IV 第1地点の調査

### 1. 遺構

第1地点で検出された遺構は縄文時代に属する堅穴住居跡1棟のみである(第6図)。堅穴住



第6図 第1地点住居跡 (1 / 50)



第7図 住居跡出土土器（1.炉内出土 2.床面直上出土 3.覆土出土）

住居跡は第1地点の北側のはば中央部に位置しており、第4層上面で遺構を確認している。第2層下部の調査中、第4層上面より10~20cm上から炭火物と焼土の小ブロックが約3m四方ほどの範囲から集中して発見され、遺構の存在が予想された。

住居跡のプランは、4層に僅かに振り込まれているのみなので明確ではないが、円形に近い隅円方形と思われる。壁の立ち上がりは、深い所でも5cmを測るにすぎない。

大きさは、ABセクション、CDセクションでいずれも4.4mを測る。床面は東西には水平であるが、南北では自然地形に沿って南から北に傾斜している。住居跡に柱穴状の28個の小ピットが検出されている。このうち深さが20cmを測るものだけでも13個あり、どれが柱穴になるのか不明である。

炉跡はほぼ中央部に設けられており、7個の自然石からなる。形状は橢円形で南北64cm、東西60cmを測る。炉石はいずれも焼けており熱のために割れているものもある。炉内には縄文土器の大きな破片が散かれている（第7図1）。床面から炉の底の土器片までの深さは15cmを測る。炉内の土器の上に炉石が一部乗っている点から、まず、住居の中央部に深さ15cmほどの径60cm余りの穴を掘り、底に土器片を敷き、土器片の周辺に自然石で石組をおこなったことがわかる。

住居跡の復土は第6図の下部に示したように5層に細分できる。

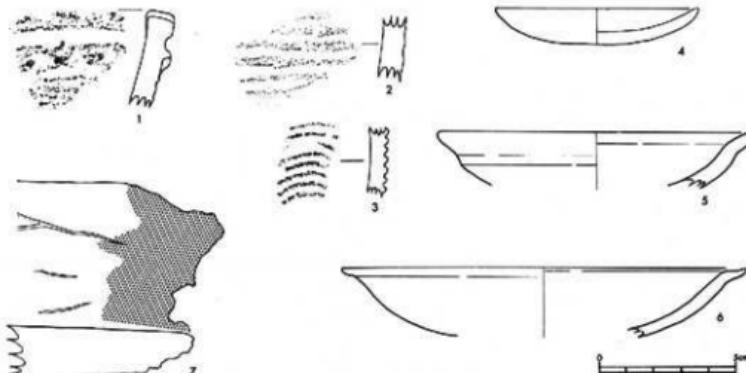
- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1層 赤褐色土(炭を含む焼土)     | 2層 黒褐色土(炭と焼土ブロックを含む) |
| 3層 黒褐色土(やや明るい、炭を含む) | 4層 暗褐色土(炭を含まない)      |
| 5層 暗褐色土(炭を含む)       | 6層 炉内覆土、黒褐色土(やや明るい)  |
| 7層 暗黄褐色土(床面、ローム層)   |                      |

住居跡覆土には木材の炭火したものと焼土ブロックが含まれているが、炭化物等は炉の周辺に特に多い。

住居跡の外には、住居跡壁に接するような状態で1個の扁平な礫が出土している。この礫の形状は石皿に極めて類似するが磨痕はみられない。出土状況と形状から石皿として使用されたものと推定される。この石皿状の礫はローム層より30cm、住居跡床面より35cm上にあり、もし、これが原位置を動いていないものとすればこの礫の置かれていたレベルが旧地表面と考えることができる。第1地点での遺物の包含が第2層の下部にまったくみられないことからもこの推定は裏づけられる。発掘では堅穴住居の深さは5~10cmほどしか確認されていないが、旧地表面が推定できたことから、実際は、35cmほど掘り込まれていることがわかる。

この住居跡の所属時期は出土した土器から推定できるが、この住居跡から出土した土器は、炉内のものも含めて僅か3点にすぎない。第7図1は炉内に敷かれていた土器で口径34cmを測る大形の深鉢形土器である。胴部径36cmで内溝しており、色調は明るい褐色を呈する。器厚は約0.8~1.0cmを測り、胎土には砂粒を含む。炉内で熱を受けているため内外面はかなり剥落している。口縁部約3cmは無文でそれより下は縄文が施されている。縄文の施行方向はかなりバラつきがあり5~10cmで方向を少しづつ変えている。

第7図2は床面より2cmほど浮いて出土した口径19cmを測る小形の深鉢形土器である。口縁部に小突起がみられるが個数は不明である。外面は無文であるが、漆状のものが塗布されており、漆黒の光沢をおびている。内面は何も塗られておらず、暗茶褐色を呈する。



第7図 第1地点出土土器

第7図3は覆土中から出土した土器片で、胎土に繊維を多量に含む。屈折部より下には縄文が施されているが、上部は無文である。繊維の量が多いためか胎土は黒褐色を呈しており、縄文時代の早期後葉から前期前葉にみられる土器に類似すると思われる。

以上の3点が住居跡内から出土した土器であるが、このうち確実に住居跡に伴うものは1の炉内の大型深鉢形土器である。しかしながらこの土器の属性からは、詳細な時期を決定することが困難である。あえて時期を推定すれば、焼成・胎土・色調等から中期のある段階のものとみなしたい。住居跡並びに炉の形態等からもこの考えに大きな矛盾はないと思われる。

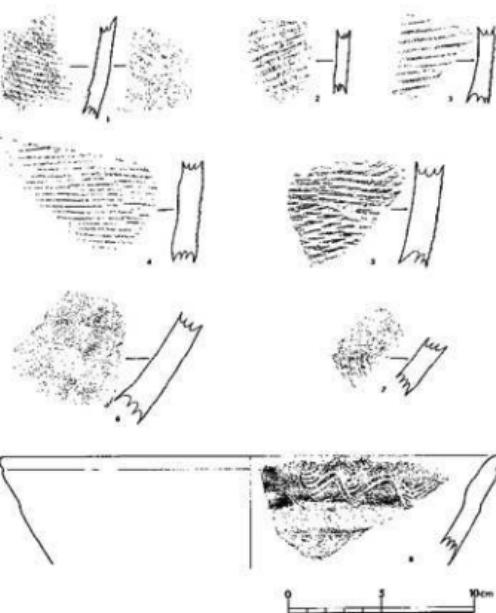
第9図 第1地点出土須恵器・珠洲系陶器  
このように第1地点で検出された竪穴住居跡は残念ながら細かな時期は推定できないが中期のものと思われる。

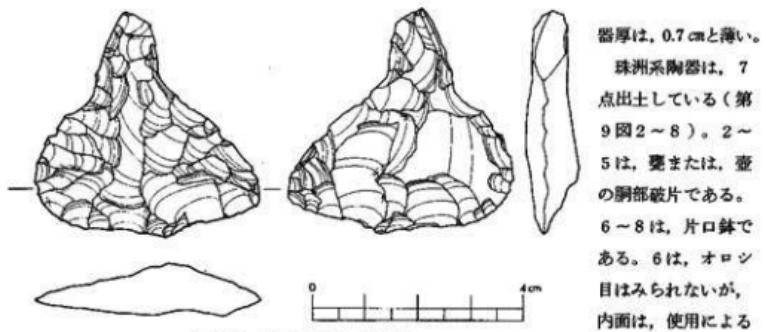
## 2. 遺 物

第1地点より出土した遺物は縄文土器、石器、土師質小皿、須恵器、珠洲系陶器、フイゴの羽口などがある。これらのうち縄文土器片がもっとも多く、約60点を数えるが、無文または縄文のみのものが大半で、紋様の施されたものは僅かに3点を数えるのみである。

第8図1は、口縁の上から2本目の縫合の上に三角形の印刻を連続して施し鋸歯状文を作り出し、その下に横位に細半縫起線が施されている。第8図3は、細半縫起線が8条施されており、1の胸部であろう。1、3ともに砂粒を多く含み焼成は不良である。3は、横位に浅い凹線が施されている。焼成は良好で堅い。1、3は、縄文時代前期後葉に位置づけられ、第8図2は、晚期と思われる。

須恵器は、1点のみ出土している(第9図1)。外面は、縄目のタタキが施されているが、タタキ目は、消されており、かすかに残存している。内面は、同心円のタタキ目が施されている。





第10図 第1地点出土石器

器厚は、0.7 cmと薄い。  
珠洲系陶器は、7  
点出土している（第  
9図2～8）。2～  
5は、要または、壺  
の胴部破片である。  
6～8は、片口鉢で  
ある。6は、オシ  
目はみられないが、  
内面は、使用による  
と思われる磨滅が著

しい。8は、口縁部内面に波状の櫛目文が、外面には、1条の沈線が施されている。6は、珠洲系陶器の前半期と考えられ、8は、珠洲編年のⅦ期（16世紀前半）に相当するものと思われる。

土師質の土器は、30片余りを数えるがいずれも土師質小皿である。器形が復元できたのは、3点のみで、口径が、7.6 cm（第8図4）、11.8 cm（第8図5）、15.0 cm（第8図6）と大きさで3類型が認められ、またそれぞれ、口縁部の形状が異なっている。4と6は、口縁部内外面にススの付着がみられ、灯明皿として用いられていたことがわかる。これらの土師質小皿の年代は、口縁部の特徴から4を除き珠洲系陶器のいずれかに伴出するものと思われる。

第8図7は、フイゴの羽口である。現長7.7 cm、径7.2 cmを測る。厚さは、約1.8 cmで、先端部は、破損が著しい。また、先端部外面には鉄錆と思われる鉛錆の付着がみられる。

石器は、7点出土しており、石匙、打製石斧、磨製石斧、凹石がある。

石匙（第10図）は、玉髓を素材として用いている。両面が入念に加工されているが、裏面の中央部に素材剥出の際のポジティブ面が残されている。つまみ部の片側には、2次加工が施されていない。住居跡の周辺より出土。

打製石斧（第11図1～4）は、4点あり、1と2は、住居跡の覆土より出土している。いずれも破損しているが、形状は、4点とも撥形と推定でき、大きさも長さ15 cm程度の中形品と思われる。1は、硬質砂岩を用いており、扁平に近い素材の剥出後、両側刃に2次加工を施している。2は、凝灰質砂岩を用い、くびれ部から刃部にかけて2次加工を施している。3は、結晶片岩を用い、素材の大形剥片の周辺に僅かに2次加工を施しているにすぎない。4は、凝灰岩を用い、ほぼ、全周を整形加工が覆っている。磨製石斧（第11図5）は、1点のみの出土で刃部は使用によるダメージが顕著にみられ、ほとんど丸みを帯びている。頭部側は折れており、折れ面より刃部に向けて剝離痕が認められる。幅は、6.6 cmを測り、長さは、13～14 cmと推定できる。石質は、不明である。

第11図6は、凹石であるが、機能的には、擦石、印石を兼ねている。中央部には、敲打による凹みがみられるが片面のみである。片側刃には、擦石として使用されたためとみられる平滑面が



第11図 第1地点出土石器（1, 2は住居跡覆土出土）

形成されている。その他の周辺部には、打撃による剝離痕が縁辺にみられる。これも住居跡周辺から出土している。

石器の組成としては、打製石斧が最も多く、石鏃がまったく出土していない点が特徴としてあげられる。これらの石器をほぼ同一時期の所産とみなした場合中期以後のものといえる。住居跡覆土または周辺からほんどの石器が出土しており、これらの石器の大部分は住居跡に居住した住人によって残されたものと考えられる。

石器としてこのほかに、剝片、石核等が多数出土するのが一般的な傾向であるが、第1地点ではまったく出土していない。つまりこの地点では石器製作をおこなった痕跡がみられない。道具として出土した石器の大半が使用による破損品であることも考え合せれば、土器も少なく、単独で1棟のみ住居跡が存在するこの遺跡の性格が、ある程度想定できる。

## V 第2地点の調査

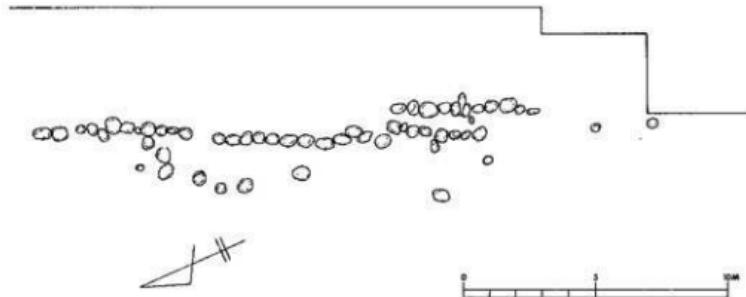
### 1. 遺構

第2地点は、1,000 m<sup>2</sup>と最大の面積の発掘調査をおこなったが既に圃場整備が実施されており、遺構として石列を確認したにすぎない。

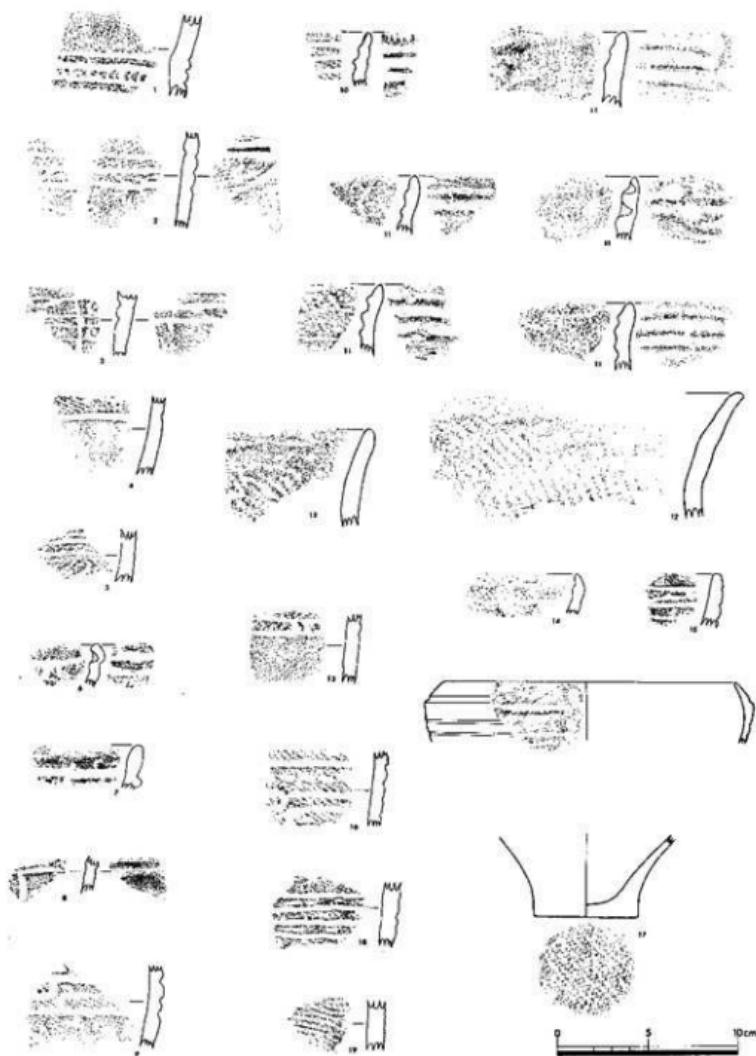
石列は、長さ24 mにわたって検出されており、一部で2列に並んでいるが、南側がかなり削平されている点や、駐畔にこの石列のものと考えられる径30~50 cmの自然礫が多数存在することから、本来は、2列で長さも、現在より長かったものと考えられる。

石列に用いられている石はいずれもローム層の直上から10 cmほど上に置かれており、石列の間から青磁、株洲系陶器が出土している。また石列の周辺から株洲系陶器、瀬戸・美濃系陶器が集中して発見されている。また、縄文土器、石器は石列の周辺では、ほとんど出土していない。

石列の石は、径30~60 cm程の花崗岩で、早月川の川原の転石と考えられる。使用されている石は、概して扁平なものが多い。



第12図 第2地点石列



第13図 第2地点出土縄文土器

この石列の性格は不明である。石列が本来は、2列であったと考えられる点から、石列が溝の両側に埋設された可能性もあるが、石列の間の埋土の観察によれば黒褐色であり水が流れた跡は認められない。周辺から土器の出土が多く何らかの建物に付随するものと思われる。あえて想像をたくましくすれば、本江B遺跡の3地点の中で、この石列の周辺のみ、中国青磁や瀬戸・美濃系陶器が出土しており、中世の本江集落の中で特殊な建物があった可能性も考えられよう。

この遺構の年代は、石列の間から出土した青磁（第17図）、珠洲系陶器（第16図17）によって推定できる。珠洲系陶器の年代は、不明であるが、青磁は、後述するように、14世紀の所産と考えられ、周辺から出土している珠洲系陶器も珠洲編年IV期14世紀に属するものが最も多く、石列の年代もこれに近いものと思われる。

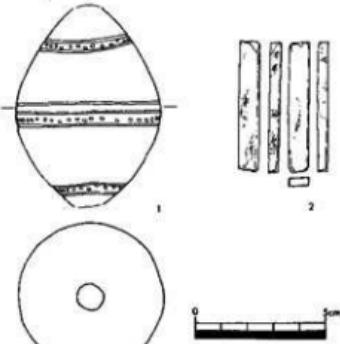
## 2. 遺 物

出土遺物としては、縄文土器、石器、土製品、石製品、中国製青磁、珠洲系陶器、土師質小皿瀬戸・美濃系陶器、越前焼、染付、越中瀬戸焼等がある。量的には、縄文土器が最も多く、次いで珠洲系陶器が多い。

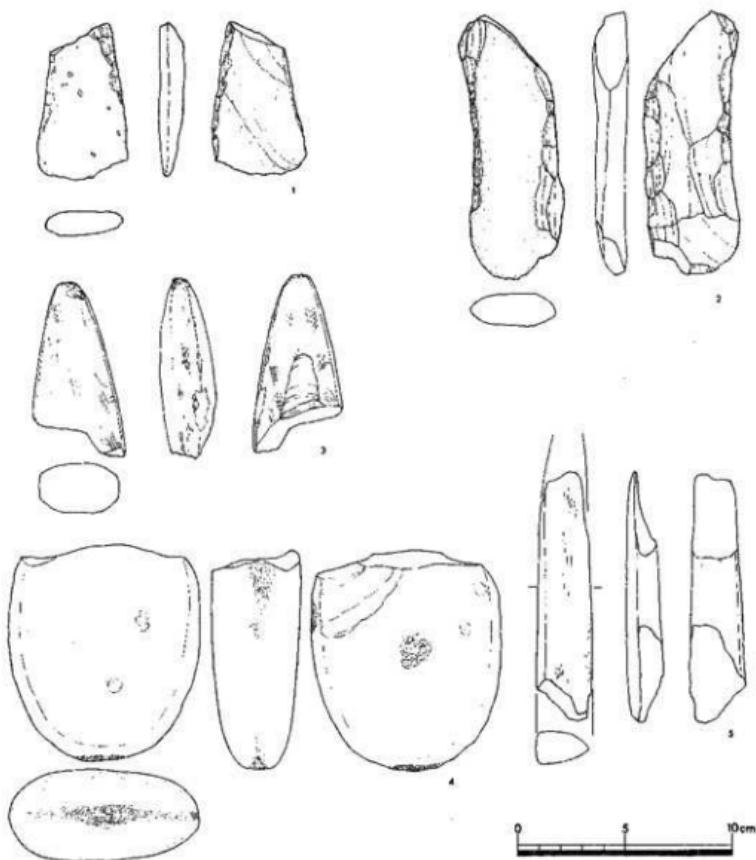
縄文土器は、700片余り出土しており、同一個体に属することが判明している破片も多いが余り接合できず、器形の全容を知ることができる個体はない。1は、横位の無文帶の下に半裁竹管により半隆起線を数条施し、そのうちの1条は、半裁竹管による連続爪形文となっている。中期前葉に位置付けられる。

縄文土器（第13図）の大半は後期に属し、その中でも中葉に位置づけられる口縁部内側に沈線を持つ一部がまとまっている。第13図2, 3, 6, 10, 11, 14がそれで、3の沈線はしっかりと深いが、他は先の丸い太い工具によるものらしく沈線は明瞭ではない。11は、すべて同一個体に属する。口縁部内面に3条の太い沈線がめぐり、その上を数ヶ所に2~3個の刺突文がみられる。6も口縁部内面に2条の沈線がめぐりその上に刺突文が施されている。外面は、数条の平行沈線が引かれそれを弧状の縦の沈線が纏いでいる。弧は、背中合わせのもの（6）、段ちがいのもの（3, 9）などがみられる。また12も同一個体に属し、50点あまりの土器片があるが器形は復元できない。口径40cm以上の大形の深鉢形と推定できる。

17は、同一個体に属する底部と口縁部であるが器高は不明である。口縁部には、3条の平行沈線が施され、その上に刺突文がみられる。器厚は、薄く焼成のよい土器である。18は、浅い沈線を平行に施したもので焼成からも後出的なものとみられる。19は、条痕土器で、晩期に属するとと思わ



第14図 有孔球状土製品・石製品



第15図 第2地点出土石器

れる。

第14図1は、有孔球状土製品と呼ばれるもので紡錘形を呈し、長軸のはば中央部に穿孔されている。孔径は、1.0cmを測る。形状は、両端がやや尖るようであるが両端とも潰れている。たぶん機能と関係するものである。長さは、8cm余りと推定できる。肩部の径は、5.6cmを測る。紋様は、両端近くに2条の平行沈線が引かれ、その間は刺突文が施されている。肩部は、3条の平行沈線が施されているが、刺突文は、1条のみである。

2は、メノウ製の石製品である。4面とも粗く磨かれている。所属時期は、不明であるが、珠

洲系陶器の集中地点より出土していることから中世のものと思われる。類例はほとんど知られていない。

#### 石器（第15図）

石器としては、打製石斧、磨製石斧、石刀、叩石がある。打製石斧は2点存在し、1は頭部が欠損しているとはいえ、現長7.1cmの小形品である。凝灰岩の小形の剣片の側辺部を簡単に整形しただけのものである。2は、ほぼ完形である。石材は不明であるが、片面に自然面を残す剣片を素材とし、両側辺に集中して2次加工が施されている。3は、粘板岩製の磨製石斧で刃部が破損している。頭部に敲打痕がみられる。器厚は厚く、断面形は胸張りの長方形になる。石刀は、磨製石斧と同質の粘板岩を素材としている。両端は折れているが明瞭に刃部が作り出されており、石刀に分類される。4は、半折した扁平礫であるが一端に敲打痕がみられる叩石である。片面の中央部には、敲打による凹みもみられる。

このほかに第2地点より、黒曜石の剣片2点、メノウ、玉髓の剣片がそれぞれ1点づつ出土している。黒曜石は、透明度が高く魚津産のものではなく、一般に信州系と考えられているものである。このほかに凝灰岩製の大形剣片が出土しており打製石斧の原材料の可能性もある。

これらの石器は、石刀が後・晩期に属する以外所屬時期は不明である。出土土器の大半が後期に属しており、おおむね土器の年代に近いものと考えられる。石器組成を見ても、打製石斧、磨製石斧、叩石で構成されており、富山平野の縄文後期のあり方に近い。

#### 須恵器（第16図1、2）

1は、杯蓋で口縁部端が下方に折れ上がる。口径は不明であるが、8世紀代までさかのぼるものと思われる。2は、壺または壺の副部破片で、外面は平行タタキ目が、内面は同心円文のタタキ目が施されている。

#### 珠洲系陶器（第16図3～19、第17図1～14）

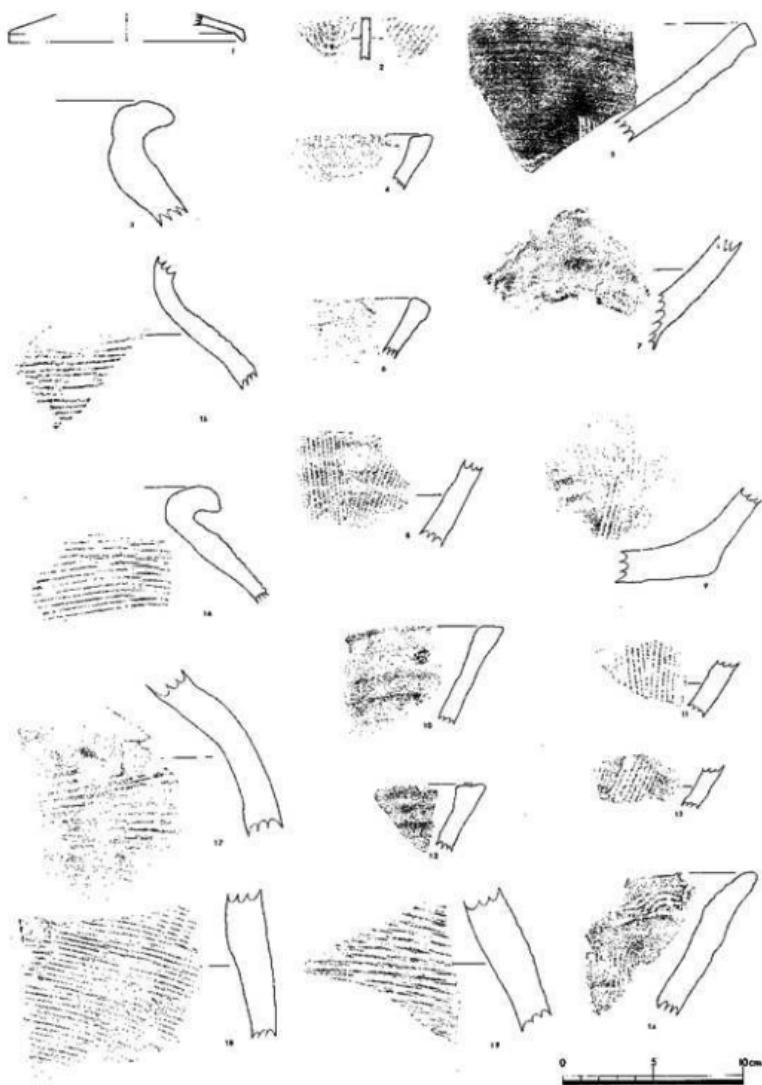
珠洲系陶器は、縄文土器に次いで多く出土しているがすべてが破片で器形が復元できるものはない。

3は、壺の口縁部で、口縁部が立ち上がり端部が「く」の字状に折れ上がる。珠洲編年のI期（12世紀後半）に位置づけられよう。4～14は、片口鉢で、5、6は口縁端部が外削りにされている。また、7、8は、オロンシ目的間隔が粗く、5、6とはほぼ同時期と考えられ、13世紀代であろう。4、10は、口縁端部が厚く水平になるもので14世紀に位置づけられよう。12は、口縁端部に櫛状工具による2条の波状文が施されている。15世紀代であろうか。14は、内削りの口縁に櫛搔きによる波状文が施されており、15世紀後半から16世紀前半のものである。

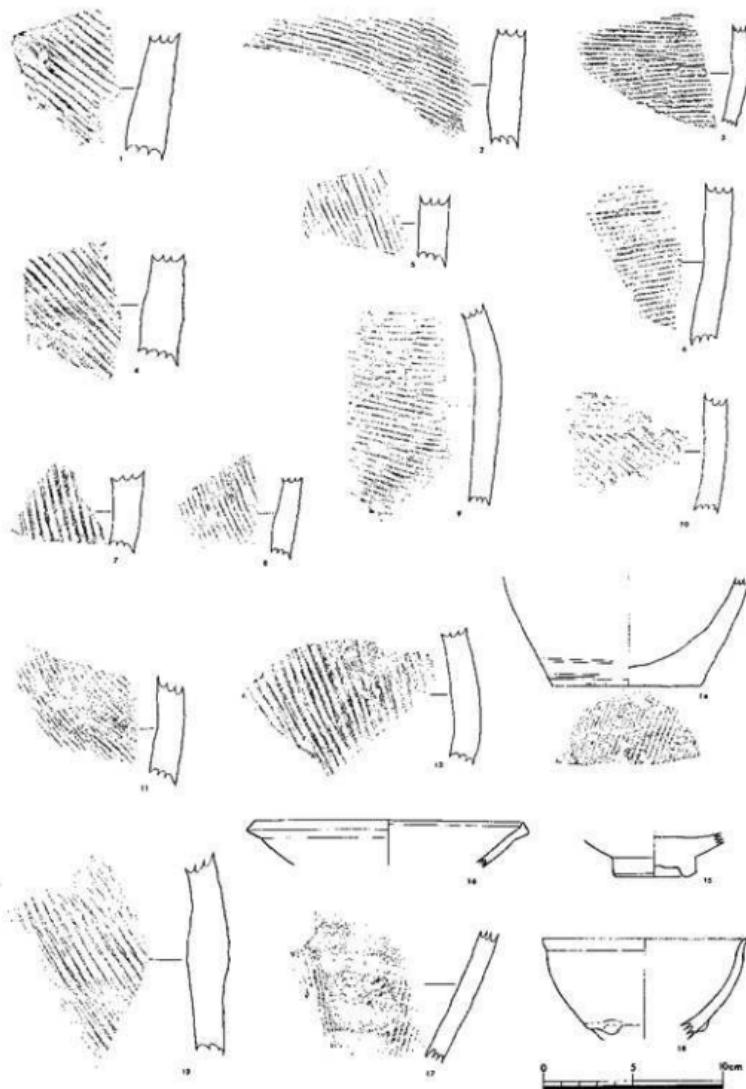
大半を占める壺、壺は口縁部の破片が少なく時期比定のできるものは少ない。15は、13世紀、16は、14世紀に置かれると思われる。他の破片も片口鉢の年代を考慮すれば、13～14世紀に属するものが大半を占めると思われる。

#### 青磁（第17図15）

青緑色の釉が施されている碗であるが胎土はあまり良質ではない。施釉は、内面と外面の高台



第16図 第2地点出土珠洲系陶器



第17圖 第2地點出土株洲系陶器，他

外側まで、高台の底、内面は釉が施されていない。高台は内・外面から切り取られている。14世紀代に位置付けられると思われる。

#### 瀬戸・美濃系陶器（第17図16、18）

明らかに瀬戸・美濃系陶器とみられるものは4点出土している。そのうち2点が圓化可能な破片である。16は皿で口縁端部が内側に折れしまがる。内外面に灰釉が施されている。18は天目茶碗で黒色の鉄釉が高台近くまで厚く施されている。器形は口縁部がゆるく外反する。このほかに瓶、擂鉢の破片がある。

#### 越前（第17図17）

越前は1点のみ確認されている。擂鉢の破片であるがオロン目の間隔は粗い。焼成は不良で黄褐色を呈する。

#### 越中瀬戸（図版）

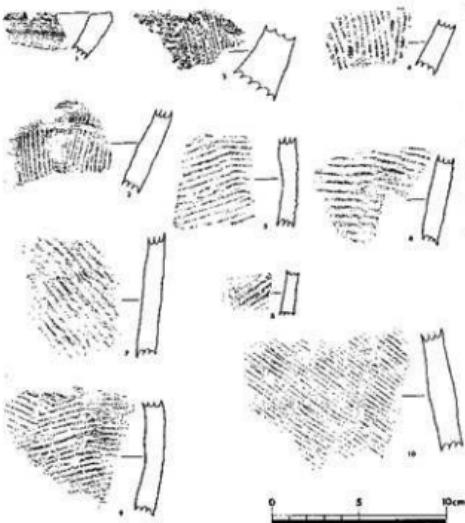
越中瀬戸は表土層を中心に出土しているが、大別して16世紀後葉～17世紀前葉のもと18～19世紀に属するものがある。

## VII 第3地点の調査

第3地点は第2地点の調査中に、魚津市文化財調査委員広田寿三郎氏によって珠洲系陶器が採集されたため、遺跡の範囲に含まれることが明らかとなった。

第3地点も国道8号線バイパス建設予定地内に所在するため、第1地点、第2地点の調査終了後、引き続き調査を実施した。調査は遺跡の範囲が明確でないため、広田氏によって遺物が採集された地点を中心に長さ20m、幅2mのトレンチを4ヶ所設定した。

発掘調査では遺物の出土がみられたが、各トレンチとも著しく攪乱されており、原位置を保ったまま発見された遺物はない。攪乱はいわゆるローム層まで及んでいたため、遺構の存在の有無を確認することもできなかった。ローム層はかなりの深さまで様々な形状の掘り込みがみられ、おそらく近世以後の壁土の採取のた



第18図 第3地点出土珠洲系陶器

めに擾乱されたものと思われる。このため、記録保存のための2次調査はおこなわず、試掘調査のみで打ち切った。

出土遺物には縄文土器、珠洲系陶器、越中瀬戸がある。縄文土器はいずれも細片と化しており、無文及び縄文のみのもので図示できるものはない。珠洲系陶器は10数点出土している。器種は片口鉢と壺または壺がある(第18図)。1.2の片口鉢は14世紀のものと思われる。壺または壺の腹部破片は年代の比定が困難であるが、5.6は平行するタタキ目が羽状ぎみに施されており、珠洲系陶器の中頃のものであろうか。

## VII まとめ

### 1. 縄文時代

縄文土器は発掘をおこなった3地点のすべてから出土しており、本江B遺跡の所在する野方台地の中央部の広い範囲が縄文時代の人々の活動の場であったことがうかがえる。本江B遺跡の東側に位置する印田遺跡でも広い範囲に散漫に遺物が出土しており、本江B遺跡と類似した状況を示しており、台地中央部における縄文時代の人類活動の一つのあり方を示しているのではなかろうか。

本江B遺跡で最初の人の存在は、第1地点の住居跡から出土した縄文時代早期末から前期初頭の土器片が示している。その後、前期後葉の土器片が第1地点から、中期前葉の土器片が第2地点より出土している。後期中葉以後では第2地点でまとまって出土している。早期～中期では断片的であるが、後期中葉以後では、集落は營まれないが何らかの活動の場として使用されたことは明らかである。

第1地点で検出された竪穴住居跡はほとんど遺物が出土していないが、火災にあっている点も含めて特異な存在である。普通竪穴住居跡が火災にあった場合、火災直前まで使用されていた土器・石器が床面から大量に出土する。しかし、本例は炉内の土器を除いて床面から出土した遺物は皆無である。これには二つ解釈が成立する可能性がある。一つは本来遺物が住居跡内に持ち込まれていない場合である。本江B遺跡で竪穴住居跡の存在が1棟にすぎないことを考えれば、この住居跡は焼却などにみられる出作小屋的な性格も考えられる。このような機能を有していた住居のため、住居跡内にまったく遺物が存在しないわけである。出土した石器の分析からも、ここでは石器の製作はおこなっておらず、大半が使用のため被損していることもこの考えを支持している。もう一つは火災に偶然遭遇したのではなく、意図的に住居を燃やした場合である。この場合は住居を燃やす前に住居内の道具を外へ持ち出せば、結果的に出土遺物のない住居跡ということになる。意図的に住居を燃やす原因としては、伝染病等で住人が死亡したとか、この住居自体がある集団の祭祀的性格を帯びており、祭祀の一環として住居に火をかける行為が存在したことも想定できる。いずれにせよ一定の地域内でのこうした住居跡の位置づけをおこなうことが、ある地域を領域としていた集団の構造を理解するために必要な作業となる。今後類例の再検討をおこ

ない、様々な可能性の中から本来の意義をさぐる必要がある。

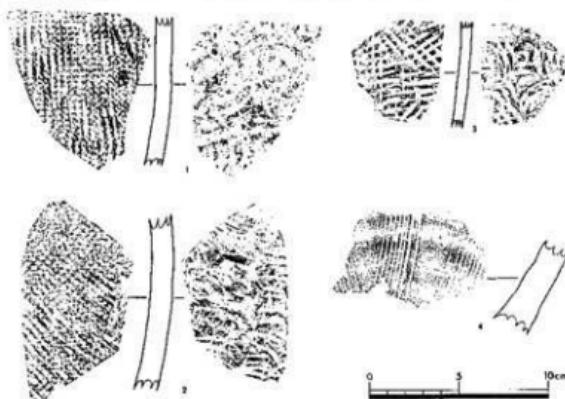
またこの住居跡でもう一つ興味深い事実がある。住居跡の覆土の断面図に示したとおり、覆土中にはかなり焼土のかたまりが見られる。火災にあっているので焼土がみられることは別におかしなことではないが、この住居跡では焼土の下から住居の木材とみられる炭化物を多く含んだ黒褐色土が検出されていることが特異である。つまり、住居の上に土が乗っていたことになる。北方地域の民族例で保溫のために堅穴住居の上を土で覆う場合が報告されているが、この場合も堅穴住居が土で覆われていた可能性が指摘できる。

## 2. 古代

縄文時代の次に人間の活動の痕跡がみとめられるのが奈良・平安時代である。第1地点と第2地点から須恵器が出土している。第2地点の杯蓋は奈良時代に属すると思われる。周辺地域で、奈良時代の拠点的集落は友道遺跡で、古墳時代から継続しており、白鳳期には寺院跡の存在も推定されている（広田 1985）。友道遺跡は角川の河口近くに位置しており、交通の拠点でもあった。その後平安時代には友道遺跡は衰退し、角川の対岸に位置する佐伯遺跡がこの段階での中心となっている。さらに奈良・平安時代は角川流域に集落が増加し、野方台地でも大光寺B遺跡（魚津市教委 1983）、友道遺跡の東約500mに位置する友道B遺跡など小規模な遺跡が出現する。第19図1～3は友道B遺跡出土の須恵器である1、2は焼成・胎土・内外面のタタキ目から同一個体と思われるが、器厚がかなり異なり部位が離れていると思われる。

本江B遺跡はこのように角川を中心とした奈良・平安時代の遺跡群の中で位置づけることができ、遺跡群の中心からやや離れた周辺でのあり方と考えられる。これ以後本江B遺跡では遺跡の規模の変動はあったが、近代まで永続的に集落が営まれたと思われる。平安時代の末期には珠洲

のI期と考えられる窯も存在しており、中世へのつながりがみられる。



第19図 1～3 友道B遺跡 4 本江D遺跡

## 3. 中世

中世では発掘したすべての地点で遺物の出土がみられ、時代の判明している珠洲系陶器の年代だけでも13世紀から16世紀にわたっている。

第1地点では特徴的なものとしてフイゴの羽口が出土しており、鉄滓等

は出土していないが、付近に関連する遺構遺物の存在が予想できる。なお、本江地内の別地点に「カジヤ田」と呼ばれる小字があり、中世の本江集落にこうした施設が何ヶ所か存在したものと思われる。

第2地点では性格の不明な石列が存在している。発掘をおこなった3地点のうち、この石列の周辺のみ、中国製青磁、瀬戸美濃系陶器、越前など珠洲系陶器、土師質土器以外のものがまとまって出土していることから、この石列は集落の中でやや特殊な建物に付随するものである可能性が指摘できる。

第3地点も本江B遺跡に含まれる中世の集落であることが判明したため、今まで断片的に珠洲系陶器の出土が報じられていた本江C遺跡、本江D遺跡、丸塚などは一連のものと考えた方がよさそうである。特に隣接する本江D遺跡(第19図4の珠洲系陶器を採集)は本江B遺跡に含まれる可能性もある。魚津市内でこれまでに知られている最も大きな中世集落であるといえよう。

中世には本江地内に華王寺が存在したという伝承もあり、中世における野方台地での拠点的集落の一つに数えることができる。

#### 4. 近世

近世以後では遺構の発見はないが、19世紀後葉～17世紀初頭の越中瀬戸が出戸しており、18～19世紀の染付、越中瀬戸も数多く出土しており、古代以後連続して営まれた集落の姿を想像ことができる。

このように今回の発掘調査は限られた範囲のみ対象となったため、本江B遺跡の全容は明らかにできなかった。しかし、出土した遺物によつた古代以後連続する人間の居住が認められ、中世においては野方台地における拠点的な集落であったことが明らかになった。魚津市内では、今まで中世の遺跡の調査が石垣遺跡でおこなわれたのみで、ほとんど空白であったが、今回の調査ではかなり実態が明らかにされたと思われる。文献も限られた時代なので、今後の調査が期待されよう。

## 引用・参考文献

- 魚津市教育委員会・富山県教育委員会 1959 「天神山遺跡発掘調査報告書」
- 魚津市教育委員会 1967 「大光寺遺跡報告書」
- 魚津市教育委員会 1971 「魚津市石垣遺跡発掘調査報告書」
- 魚津市教育委員会 1973 「魚津市埋蔵文化財遺跡分布調査報告書」
- 魚津市教育委員会 1981 「富山県魚津市佐伯遺跡」
- 魚津市教育委員会 1982 「富山県魚津市早月上野遺跡」
- 魚津市教育委員会 1983 「富山県魚津市早月上野遺跡」
- 魚津市教育委員会 1983 「富山県魚津市遺跡分布調査概要Ⅰ」
- 魚津市教育委員会 1984 「富山県魚津市遺跡分布調査概要Ⅱ」
- 魚津市教育委員会 1985 「富山県魚津市遺跡分布調査概要Ⅲ」
- 富山県教育委員会 1972 「魚津市石垣遺跡発掘調査報報」
- 富山県教育委員会 1976 「富山県魚津市早月上野遺跡第2次緊急発掘調査報報」
- 富山県教育委員会 1979 「富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要」
- 富山県教育委員会 1979 「富山県測量整備開拓事業埋蔵文化財発掘調査報報」
- 富山県教育委員会 1982 「北陸自動車道遺跡調査報告—魚津市編—」
- 広川内三郎・麻柄一志 1985 「富山県魚津市友道遺跡出土の瓦について」「火燒9号」
- 麻柄一志 1981 「魚津市友道遺跡出土の古墳時代須恵器」「かんとりい第5号」
- 麻柄一志 1983 「北陸の高地性集落とその評価」「富山市考古資料館紀要第2号」
- 宮田進一 1984 「県内出土の中世土器編年図」「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木賀村 油屋」
- 宮田進一 1984 「土師質土器について」「富山県上市町弓庄城跡第4次緊急調査概要」
- 宮田進一 1985 「出土遺物による時期区分」「富山県上市町弓庄城跡第5次緊急調査概要」

# 丸塚と灰塚の調査

## 1. はじめに

魚津市本江島内の県道島尻一金屋線に面して小さな塚がある。塚の上には「大音主馬の碑」と呼ばれる高さ1m余の石碑が建っており魚津市の指定文化財となっている。

塚は、大音主馬の墓とか丸塚とか呼ばれていた。ところが、北陸自動車道が建設され、魚津市印田地内に魚津インターチェンジが設置されることになり、市街地と、魚津インターチェンジを結ぶ幹線道路として県道島尻一金屋線が拡張整備されることになった。この拡張地に市指定文化財大音主馬の碑と丸塚が含まれていることが判明した。しかしこの塚は、『富山県遺跡地図』に登録されておらず、市教委では、県道並工事の計画を開き昭和55年、魚津土木事務所に指定文化財と埋蔵文化財の存在を伝え、その保護対策を要望した。

その後、協議を重ねたが北陸自動車道魚津インターチェンジは既に工事が始まっておりそれに接続する県道の路線の変更が困難であるとの回答を得たので丸塚は発掘調査をおこない碑は隣接地に移転することになった。調査は、当初昭和57年度中に予定していたが用地買収の遅れ等で58年度にずれこむことになった。

丸塚の調査の準備をおこなっていたところ約50m南側に位置する灰塚が、地主の土取りによ



第20図 丸塚(A)と灰塚(B) (1/2500)

り消滅することになり合わせて発掘調査を実施した。

九塚は、魚津市本江字畠田81番地に所在する。塚は、野方台地と呼ばれている角川と片貝川に挟まれたなだらかな洪積丘陵のはば中央部に立地する。標高は約60mを測る。塚は、県道に面しており敷地は約100m<sup>2</sup>で、塚の径は、約10mである。塚の上には杉の古木が2本存在していたが大きい方は昭和47年に枯れたため伐採した。

九塚から県道を挟んで約50m東側に灰塚とよばれる径約8m高さ約2mの塚が存在する。この塚も九塚と同様の規模である。このほかに付近の遺跡としては、本江C遺跡（中世）本江D遺跡（中世）本江B遺跡（縄文）本江A遺跡（縄文）があるが、大半の地区で墳場整備が実施されおり本江B遺跡を除いてほとんど破滅状態であるといつてよい。

九塚の周辺では古くより、遺物等の出土が注目されていた。昭和11年に下野方尋常小学校より刊行された『郷土調査』には、昭和4年に本江神明社境内より打製石斧数点の出土と神社の隣の住人が付近の用水より磨製石斧を探集したことなどを記している。また、通称八津谷より昭和7年、縄文土器、石器の出土を報じている。今の本江A遺跡である。

このほかに、同書には、『占墳と朝鮮土器』という項を設けて、本江地内の古墳（塚）と朝鮮土器（須恵器と甕焼）を詳しく紹介している。同書刊行時には、丸塚、灰塚のほか、7ヶ所の塚の存在が記されている。現在では、このうち2基のみが存在している。その他は、ことごとく破壊されたものと考えられる。特に四ツ塚は、昭和11年、『郷土調査』が執筆された時点で既に3基が消滅しており、伝承と記録のみが残っているにすぎない状態であった。

九塚の上に立つ石碑は大音主馬の碑と呼ばれている。大音主馬は寛永4年（1627）魚津城が廃城後、初代の魚津町奉行、初代越中郡代として赴任し、寛永13年（1636）に魚津で死去している。

石碑の正面には

大音氏  
故追成院殿亨安日全大居士  
厚用靈

左面には

石塔造立意趣者惟時享保二十乙卯  
獻振乾德院殿尤一百達忌追盡者

右面には

一念淨心開梵場 高懸因鏡現常光  
銘日 朝來入室見何事 郁都只聞功德香

裏面には

功德主加州住大音氏六代孫厚固当  
本行山中興十一進日勝欽拜

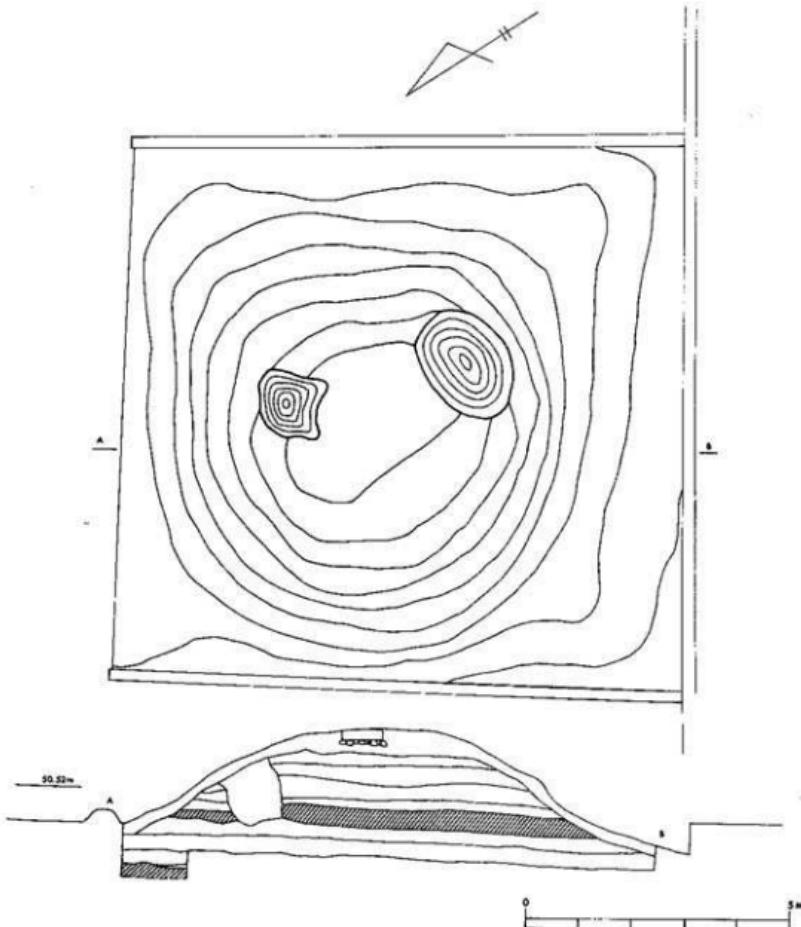
と記されている。

つまり、この石碑は享保20年（1735）に大音主馬の百年忌に六代目の子孫にあたる厚固により建立されたものである。

『魚津古今記』によれば「一説ニ石廟所初メハ上村木領住還ノ辺リニアルヲ松雲院様御入国ノ

刻御覽シテ此塚ヲ往来ノ辺リヲ除ケテ外ニ築クヘキ命有ルニ依テ夫ヨリ本江村ニ塚ツケリトイヘリ但塚二ツ有一ツハ石碑一ツハ灰塚トイヘトモ兵貝ノ類ノ塚ナル……。」とされている。地元では、丸塚を大音主馬の墓といい、灰塚を主馬の妻の墓であるという伝説が残されている。

ところで、昭和47年に丸塚の上の杉の大木が枯れたため、長井真隆氏によって調査されているが、樹令は400年余りと推定されている。この杉の年代は故郷、伝説の年代と矛盾をきたして



第21図 丸塚測量図

いた。

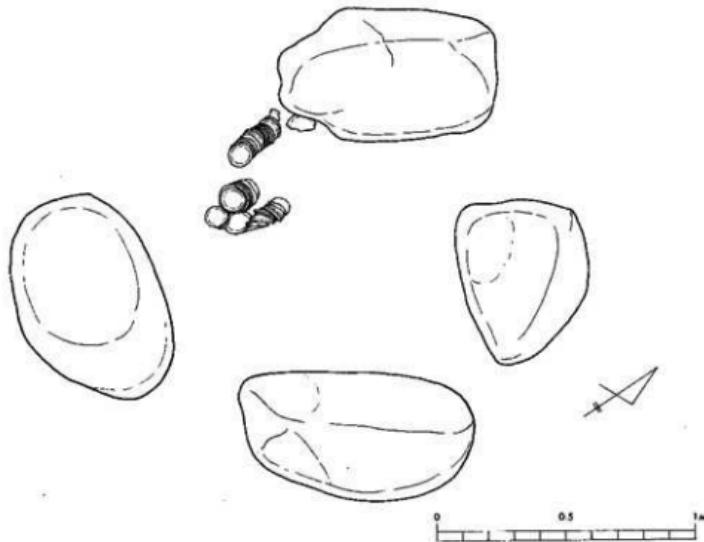
## 2. 丸塚の調査

発掘調査は、まず、墳頂部に任意に基準杭を設け、それを中心に東西南北に4分割し、十字にセクションベルトを残し、土層の観察をおこなった。第21図は、南北セクションの土層図である。第1層は、草木の根茎で擾乱の著しい表土層で、塚全体に約30cmの厚さでみられる。表土層の下は、2層暗褐色土層が約20cm、3層黒褐色土層が約30cm、4層暗褐色土層（黄褐色粘質土ブロック混）約30cm、5層黒褐色土層がほぼ水平に堆積している。6層に混入している黄褐色粘質ブロックは、富山平野の洪積台地で一般的にみられるいわゆるローム層である。このローム層は、丸塚の位置する野方台地でも地表から50～100cm下に堆積している。つまり塚の工築にあたっては周囲を掘り下げ盛土したことがわかる。

7層は、暗褐色土層で、塚が工築される前の表土層であると考えられる。さらに、その下に黒褐色の8・9層がある。10層は、漸移層で、11層は、ローム層となっている。

尚、内部施設は、後述するよう4個の石より成っている。これらの石は、4層の直上にえらべられている。また、この石は、3層の中に含まれていることより、4層が盛られた直後に4個の石が置かれ、その後3層の土が盛られたことがわかる。

この4個の自然石は50～80cmの長さを測り、少しづつ間隔を置いて設置されているが、置か-



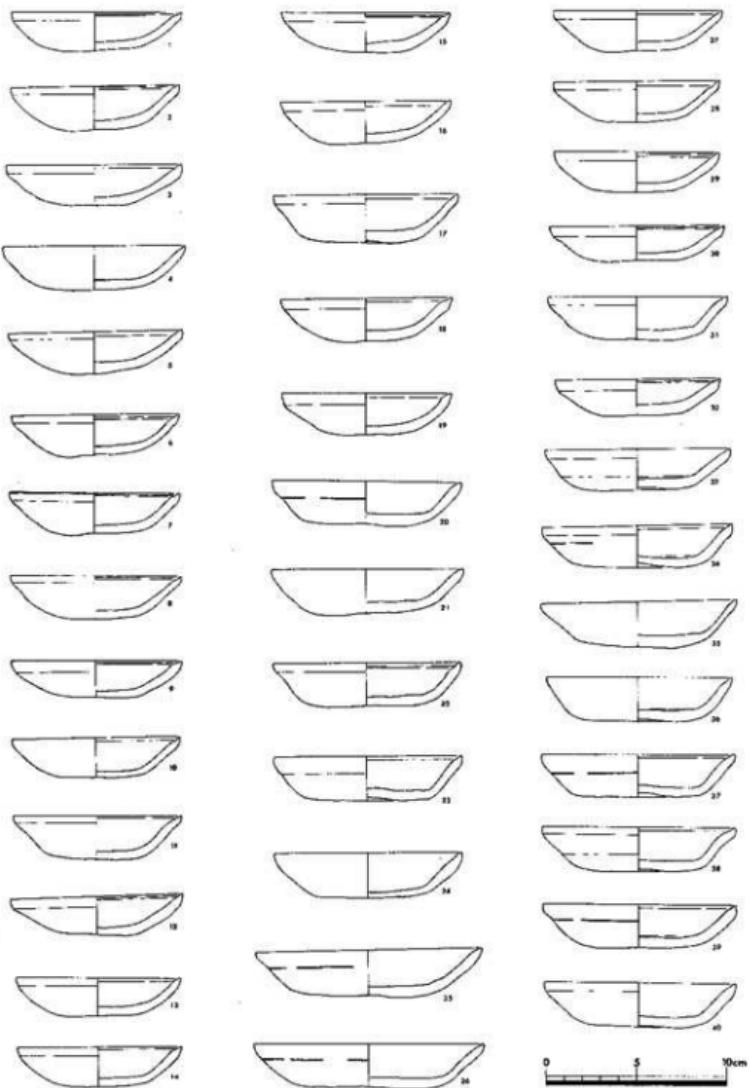
第22図 丸塚土師質小皿出土状態

れた状態は石室のようである。内側は約120cmの空間を有している。石材は加工のまつたくみられない花崗岩で、早月川の砾石と推定される。この石室状の遺構は塚の中心部よりやや東側にあり、塚を半載した段階では確認されていない。なお、石室状遺構の埋土は3層と同じ土層であり、遺構外と遺構内とは同一の堆積状態を示しているといつてよい。つまり、石室状遺構の内部は遺構外に3層の盛土がおこなわれるのとほぼ同時に同じ土で埋められたものと理解できる。

石室状遺構内からは40枚の土師質小皿が出土している。出土状態は、10枚づつの土師質小皿が3ヶ所に重なったままの状態で倒れている。ちょうど土師質小皿が出土している地点に太い杉の根がのびており、この根によって若干遺物が移動しているとみられるが、本来は10枚づつ3ヶ所に重ねて立てられていたものと思われる。これらの出土位置は石室状遺構の西の隅に置かれており、これが遺構内の埋置の中心的なものでないことを示唆している。また、出土レベルは、黒褐色土の下部であり、石室状遺構が4個の石で作られた直後に土師質小皿が中に置かれ、周囲の盛土と一緒に埋められたことを示している。石室状遺構の内部は、他の遺物の有無を確認するため、埋土をふるいにかけ精査したが、何も得られていない。また、木製品等の痕跡を確認することもできなかった。

第2表 出土土師質小皿一覧表

図番号	口径(cm)	器高(cm)	備考	図番号	口径(cm)	器高(cm)	備考
1	9.4	2.15	内面にスス	21	10.65	2.45	外外面にスス
2	9.3	2.45	内面にスス	22	10.4	2.4	内面にスス
3	9.7	2.25	内面にスス	23	10.4	2.45	内面にスス
4	10.1	2.45	外外面にスス	24	9.4	2.5	内面にスス
5	9.6	2.4	内面にスス	25	12.5	2.5	—
6	9.25	2.25	内面にスス	26	12.7	2.4	内面にスス
7	9.5	2.3	内面にスス	27	9.35	2.25	外外面にスス
8	9.5	2.4	内面にスス	28	9.25	2.3	内面にスス
9	9.45	2.0	外外面にスス	29	9.1	2.25	内面にスス
10	9.3	2.2	内面にスス	30	9.65	1.95	内面にスス
11	9.3	2.4	内面にスス	31	9.9	2.4	内面にスス
12	9.55	2.15	内面にスス	32	9.15	2.0	内面にスス
13	9.2	2.15	内面にスス	33	10.25	2.25	内面にスス
14	9.1	2.2	内面にスス	34	10.55	2.3	内面にスス
15	9.3	2.25	内面にスス	35	10.85	2.5	内面にスス
16	9.45	2.35	内面にスス	36	10.2	2.4	外外面にスス
17	10.2	2.7	—	37	10.7	2.35	内面にスス
18	9.45	2.4	外外面にスス	38	10.7	2.45	外外面にスス
19	9.4	2.3	内面にスス	39	10.7	2.4	外外面にスス
20	10.4	2.35	内面にスス	40	10.6	2.45	内面にスス

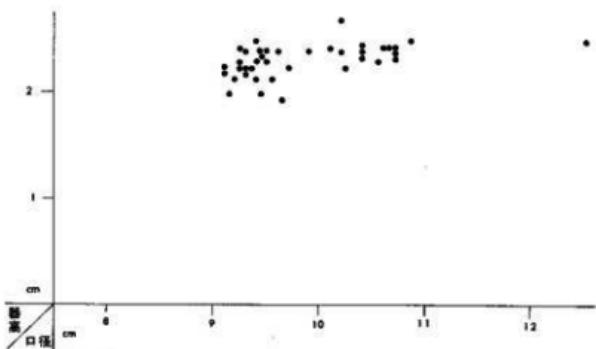


第23図 丸塚出土の土師質小皿

### 3. 出土遺物

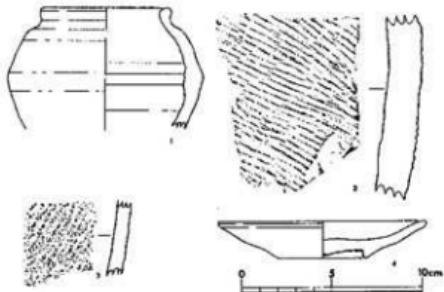
丸塚の出土遺物は石室状遺構内から出土したものと、墳丘の盛土または表土から出土したものがある。石室状遺構内からの遺物は、先述のとおり40点の土師質小皿である。土師質小皿は口径9.1cmから12.7cmまでバラエティに富むが、器高は1.95cmから2.7cmまでで比較的近い数値を示している。口縁端部は特徴的で、先端を細く仕上げ、やや内湾させる。法量で若干の差はみられるが、口縁端部の特徴は40点ともほぼ一致している。色調は淡褐色を呈し、胎土・焼成と同様すべての個体が類似している。法量では第24図に示したとおり、3群に分けることができる。口径が9.2~9.6cmに集中する一群、10.4~10.7cmに集中する一群、12cmを越える一群である。このように口径では類型化できるが、40点中38点にススの付着がみられること、出土状態が3群混在していることなどから、埋置にあたっては区別されていなかったと思われる。器面には口縁端部の外側に著しくススの付着がみられ、これらの土師質小皿が灯明皿として用いられたことを示している。中には1cmの余りのススの付着が連続して口縁部の大半にみられるものもあり、これらは灯芯の跡と考えられ、かなり長時間にわたって使用されたものと考えられる。

さて、この土師質小皿の年代は、他に伴出遺物がないので土師質小皿自体の特徴から求めなければならない。上市町弓庄城跡では5次にわたる発掘調査がおこなわれ、出土遺物は宮田進一氏によってV期に分類されている（宮田 1985）。この中ではIV期に含まれる土師質小皿に類似するものが存在する。弓庄城跡のIV期の実年代は16世紀と考えられている。ただし弓庄IV期にみられるいわゆるヘソ皿は丸塚には存在しない。また器形・法量で弓庄IV期に存在するバラエティも認めることができない。これは一つに、丸塚の土師質小皿がすべて灯明皿として機能していたため、また、時期的にも極めて短期間に製作されたいわば純粋な資料であるためであろう。また、宮田氏の土師質土器の分類では、口縁端部を少しつまみ上げ、平底となる丸塚の土師質小皿はB-11類に分類されている（宮田 1984）。宮田氏はB-11類を16世紀から17世紀前半まで見られるとしている。



第24図 丸塚出土土師質小皿の法量

さらに、京都市内における土師質小皿の編年では平安末から江戸時代までを10期に分けた中で、Ⅳ期の土器の中に類似するものがみられる（松藤 1978）。Ⅳ期



第25図 丸塚・灰塚出土遺物

珠洲系陶器は壺の破片で時期比定できるものではない。表土から出土している越中懶戸は江戸時代のものである。塚が築かれた後に表土に混入したものと思われる。

#### 4. 丸塚の性格について

丸塚は、塚の中心近くに4個の石による石室状造構が設けられている点から、この中に何かを埋置するための施設であることは想像に難くない。石室状造構内より出土の土師質小皿より、丸塚の年代は16世紀と推定することができるが、中世末期で何らかの物を中に埋める目的で築かれたものとしては、墳墓または経塚が一般に考えられる。しかし石室状造構は石の内側の大きさが、約120cm×約90cm、高さが40cm余りを測るにすぎず、また内部に蔵骨器も存在しておらず、墳墓とは考えにくい。また経塚としても、それに関連する遺物が出土していないことから否定的にならざるを得ない。魚津市内の中世墳墓は市内吉野にかけて所在したが、中からは13世紀後半に位置づけられる古懶戸の蔵骨器が出土しているのみで、石室状造構の存在は伝えられていない（魚津市教委 1982）。また、市内天神野新で一字一石壁を出土した経塚が調査されているが、ここでも丸塚のような造構は確認されていない。また、吉野の中世墳墓は墳丘の高さが50cm余といわれ、天神野新経塚も高さが1m未満と伝えられており、径はいずれも5m程度のものと考えられている。墳丘の規模においても大きな差がある。

石室状造構内から出土した遺物は、土師質小皿のみであるが、造構の隅の部分にまとめられており、本来は何かが中心的に埋置されていたが、腐敗してしまった可能性もある。土師質小皿は大半が、灯明皿として使用されたことが明確であり、塚の工築途中に石室状造構内に埋められたものである。塚の工築にあたり灯明をたいた何らかの祭的な行為が存在し、使用後それが塚の中に埋められたことも考えることができよう。しかし、この行為が塚築造の本来の目的とは考えられず、発掘の所見からは、丸塚の性格を明らかにすることはできなかったといわざるを得ない。本江地内にはこのほかに灰塚が存在しており、またかって他に多数塚が存在したことが伝えられており、また隣接する印田地内にやはり中世のものと考えられる大塚が存在している。中世に

は16世紀中葉から後葉の実年代が与えられている。

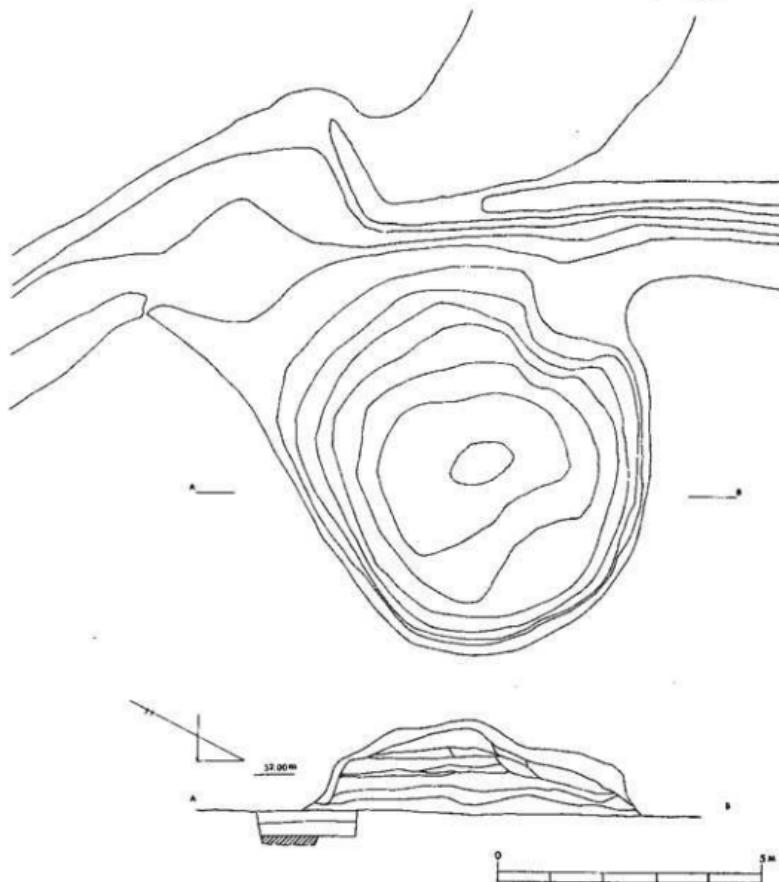
このように丸塚より出土の土師質小皿は、今のところ16世紀と考えることができる。

このほかに墳丘の盛土、表土より繩文土器、珠洲系陶器、越中懶戸が出土している（第25図1～3）。繩文土器（3）と珠洲系陶器（2）は2層の盛土から出土しており、越中懶戸（1）は表土からの出土である。墳丘の盛土中から出土の遺物は、塚の築造年代の下限を示すものであるが、

おける塚の集中地帯といえる。今後調査でその性格が明らかにされていくものと思われる。なお、地元に伝えられていた大音主馬の墓であるという伝説は今回の調査で否定され、塚の構築年代は塚上の杉の年代とおおむね一致している。大音主馬の碑は古くより存在していた塚の上に立てられたものであることが明らかになった。

## 5. 灰塚の調査

灰塚は水田の隅に位置しており、直径約8m、高さ1.8mの不正円形を呈する。塚の面積は50



第26図 灰 塚 測 量 図

m<sup>2</sup>余りにすぎないが、土地台帳の面積は81 m<sup>2</sup>と記されている。塚の北側から東側にかけてはかなりの急斜面となっており、後世にかなり削られていることがわかる。塚の南西部はコンタの間隔が広く、この部分は駐畔と水路に接しており、本来の形状をとどめていると思われる。塚の北側に僅かな凹みがあり、断面図でもこの部分に擾乱がみられる。かつて灰塚が盗掘されたと云い伝えられており、この部分がそれに該当するものと思われる。

灰塚の盛土は、北側の擾乱部を除き10層に区分できる。盛土はいずれも黒褐色、暗褐色土層で、丸塚のようにローム層の再堆積はみられない。つまり、塚の盛土にあたっては周辺の表土等のみでおこなっており、あまり深く掘り上げていないことがわかる。

灰塚より出土した遺物は表土より越中蘿戸が1点出土した(第25図4)のみで、盛土内からの出土遺物はない。また、丸塚のような石室状遺構も存在していない。灰塚の調査所見からは年代等の推定は困難であるが、丸塚に近接して築かれており、墳丘の形状も類似していることから、丸塚に近い年代が考えられよう。

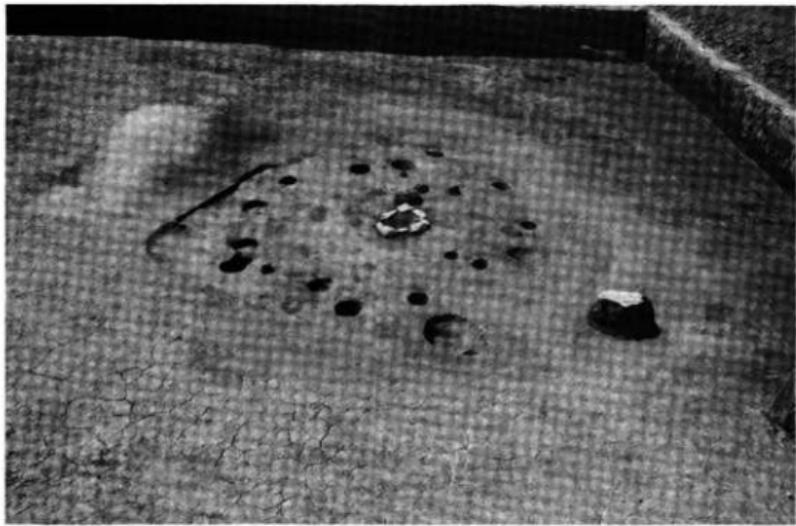
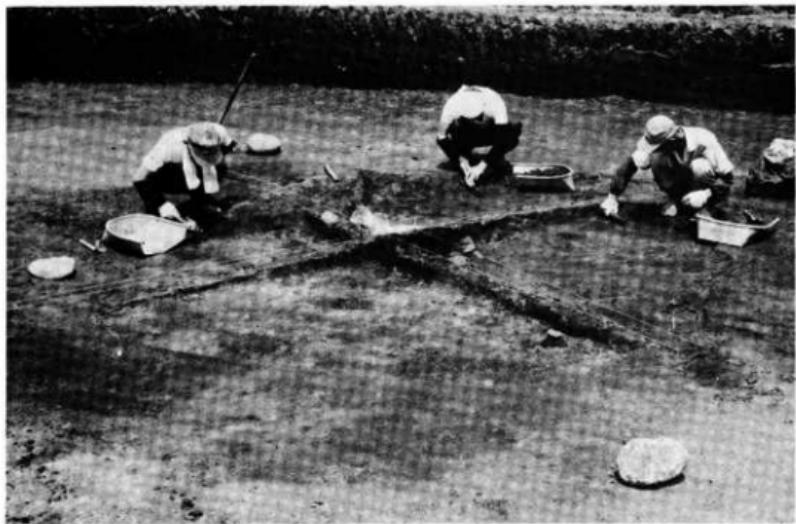
また、この塚の性格は丸塚以上に推定が難しい。やはり墳墓・経塚とは考えにくく、別の機能を考える必要がある。あるいは、丸塚・灰塚ともに、十三塚のように民間信仰との関連で塚築造の意図を考える必要があるかもしれない。

## 引用・参考文献

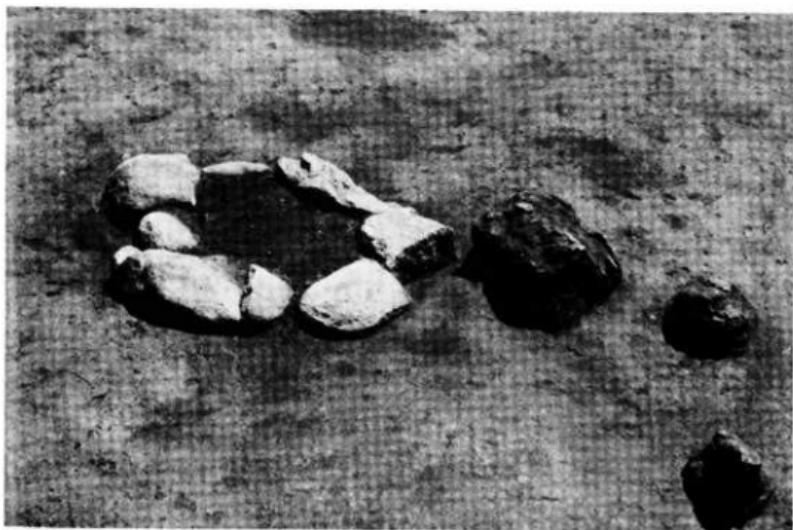
- 魚津市教育委員会 1981 『富山県魚津市印田近世墓発掘調査報告書』  
魚津市教育委員会 1983 『富山県魚津市遺跡分布調査概要Ⅰ』  
上市町教育委員会 1984 『北陸自動車道遺跡調査報告ー上市町木器総括編』  
上市町教育委員会 1984 『富山県上市町弓庄城跡第4次緊急調査概要』  
上市町教育委員会 1985 『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急調査概要』  
松 藤 和 人 1978 『同志社キャンパス内出土の土器陶器の編年』『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物Ⅰ』  
宮 田 進 一 1984 『県内出土の中世土器編年図』『北陸自動車道遺跡調査報告ー上市町木器総括編』  
宮 田 進 一 1984 『土師質土器について』『富山県上市町弓庄城跡第4次緊急調査概要』  
宮 田 進 一 1985 『出土遺物による時期区分』『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急調査概要』  
下野方尋常小学校 1936 『郷 土 調 査』



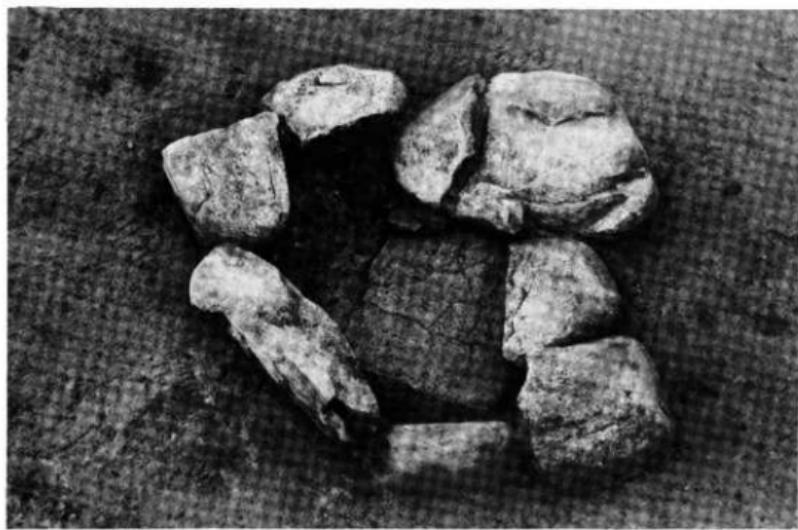
第1地点 試掘調査（1984年11月）



第1地点 堅穴住居跡



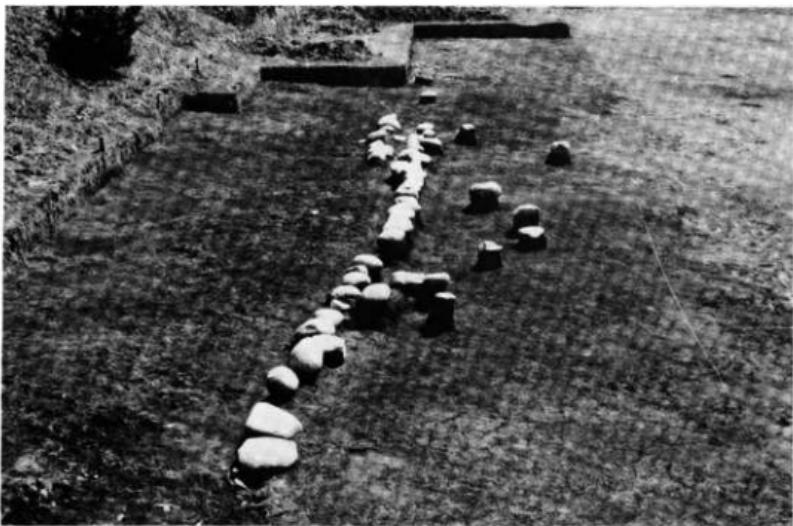
第1地点 壁穴住居跡



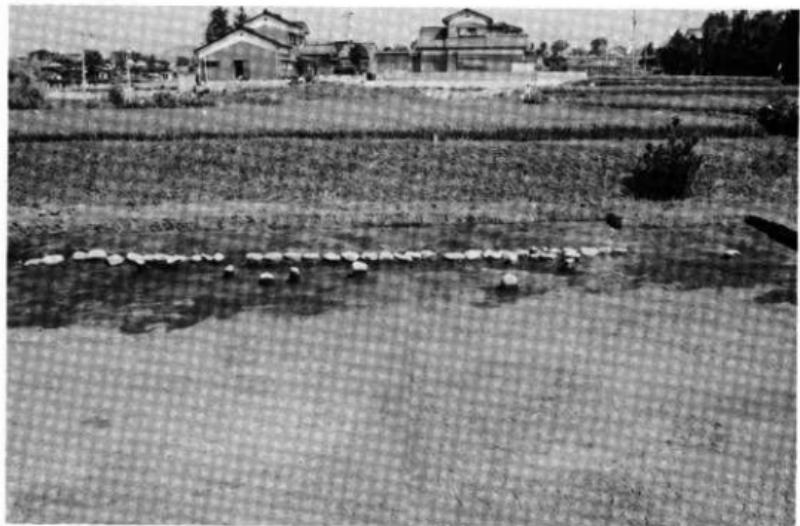
第1地点 炉内の土器



第2地点 発掘風景



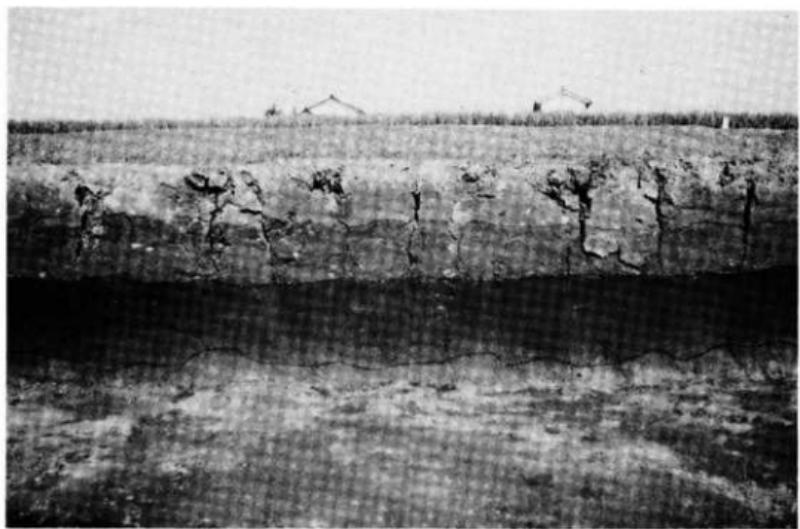
第2地点 石 列



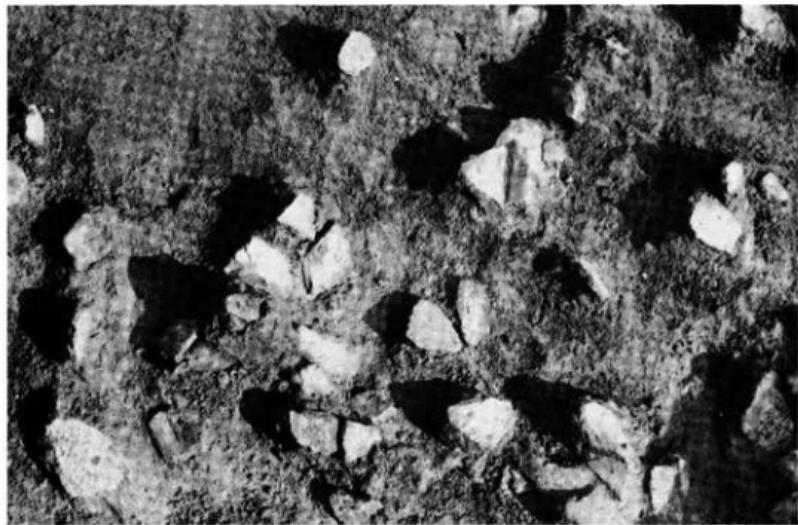
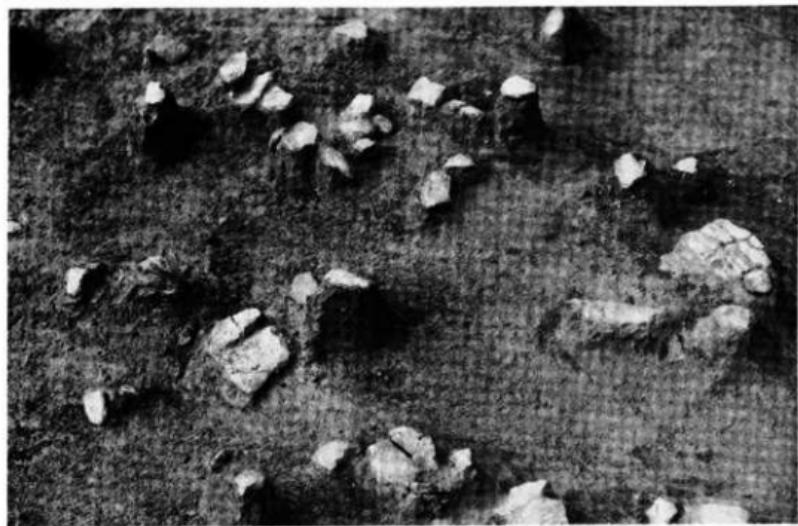
第2地点 石 列



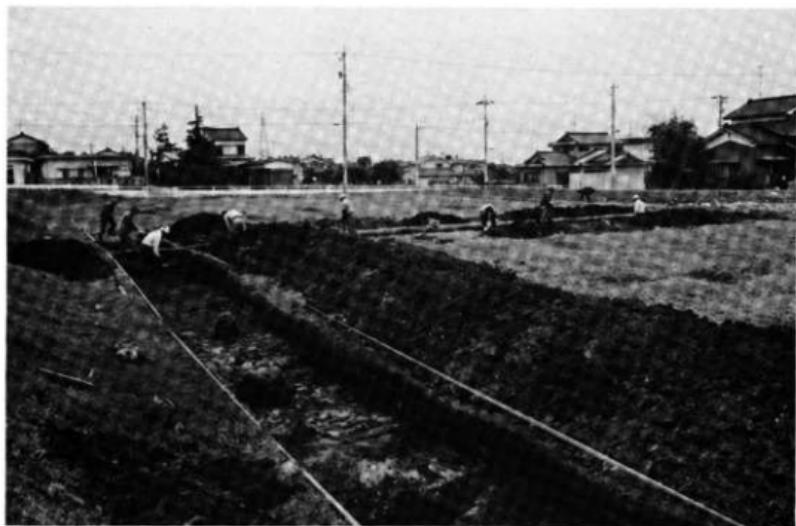
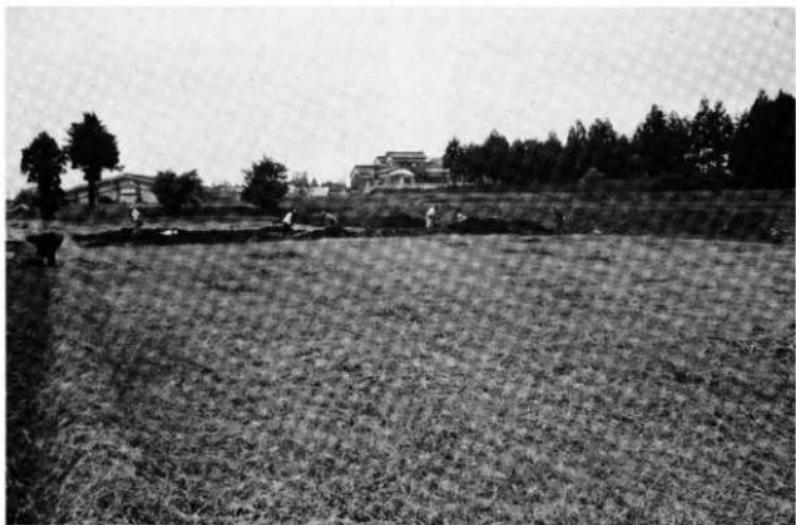
第2地点 発掘区全景（上）石列中の珠洲系陶器



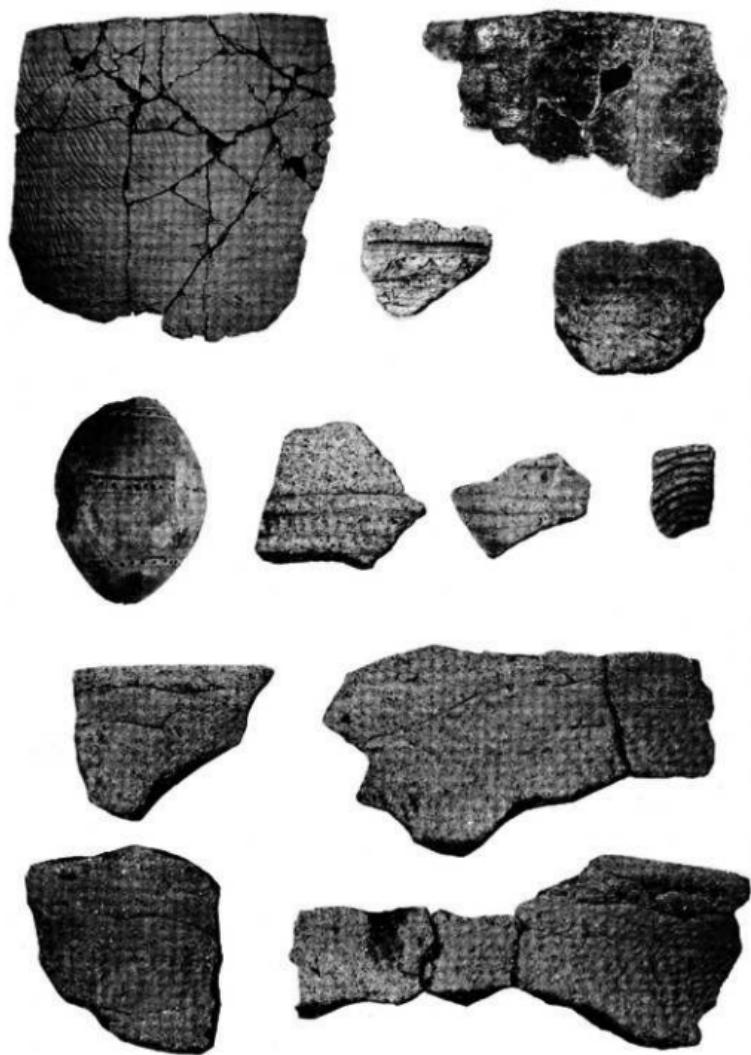
第2地点 包含層発掘風景（上），土層（下）



第2地点 楔文土器出土状况



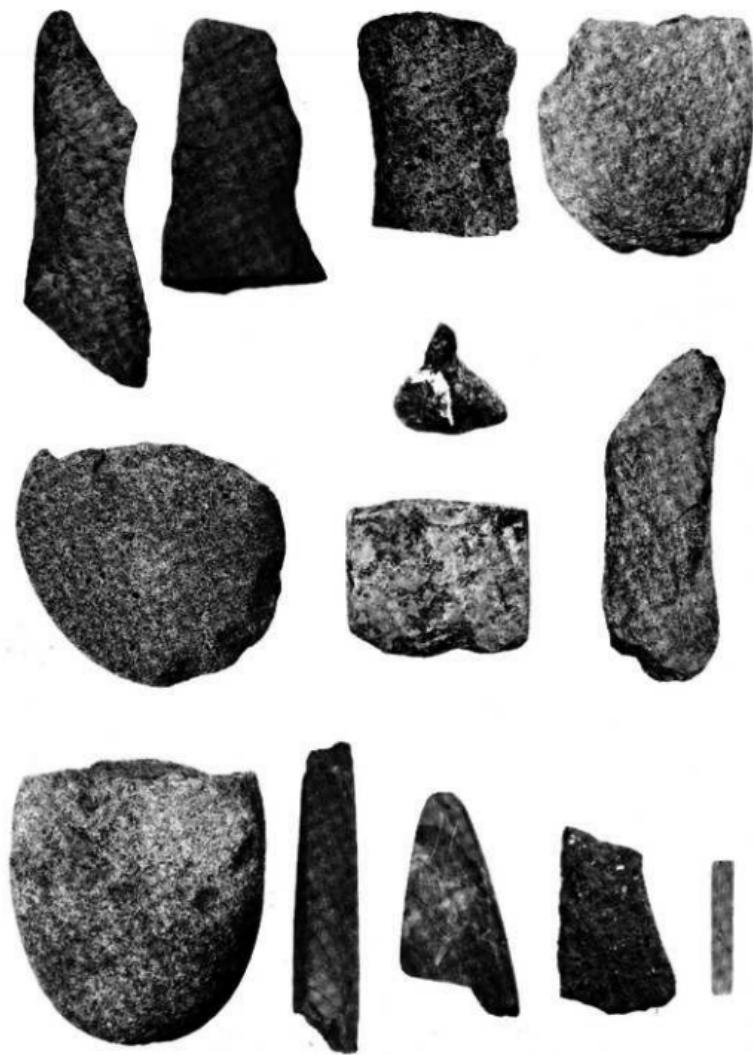
第3地点の調査



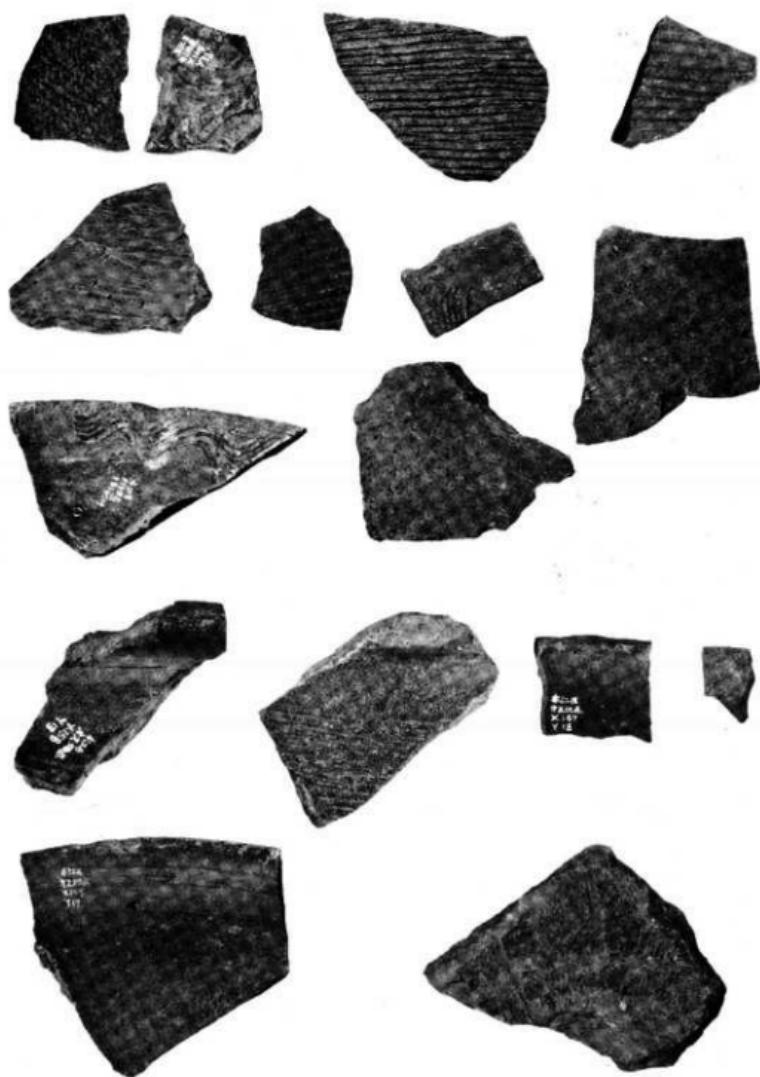
繩文土器 上第1地点 下第2地点 (左上1/4 他は1/2)



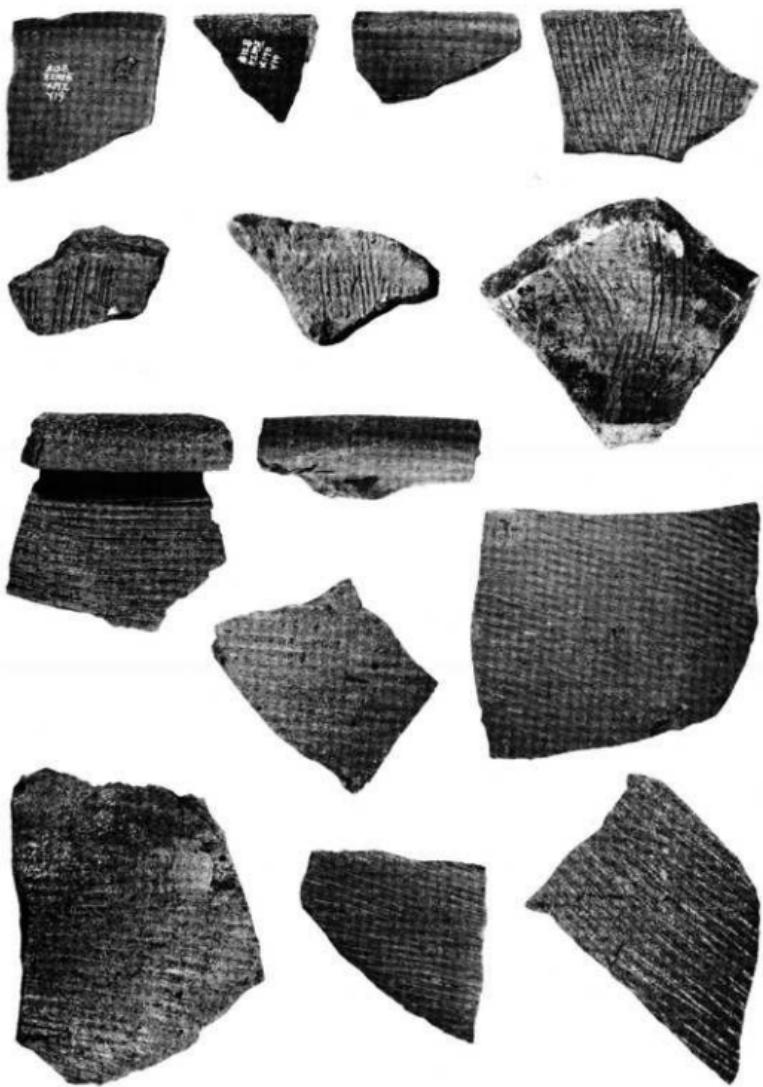
第2地点 出土縄文土器 (1/2)



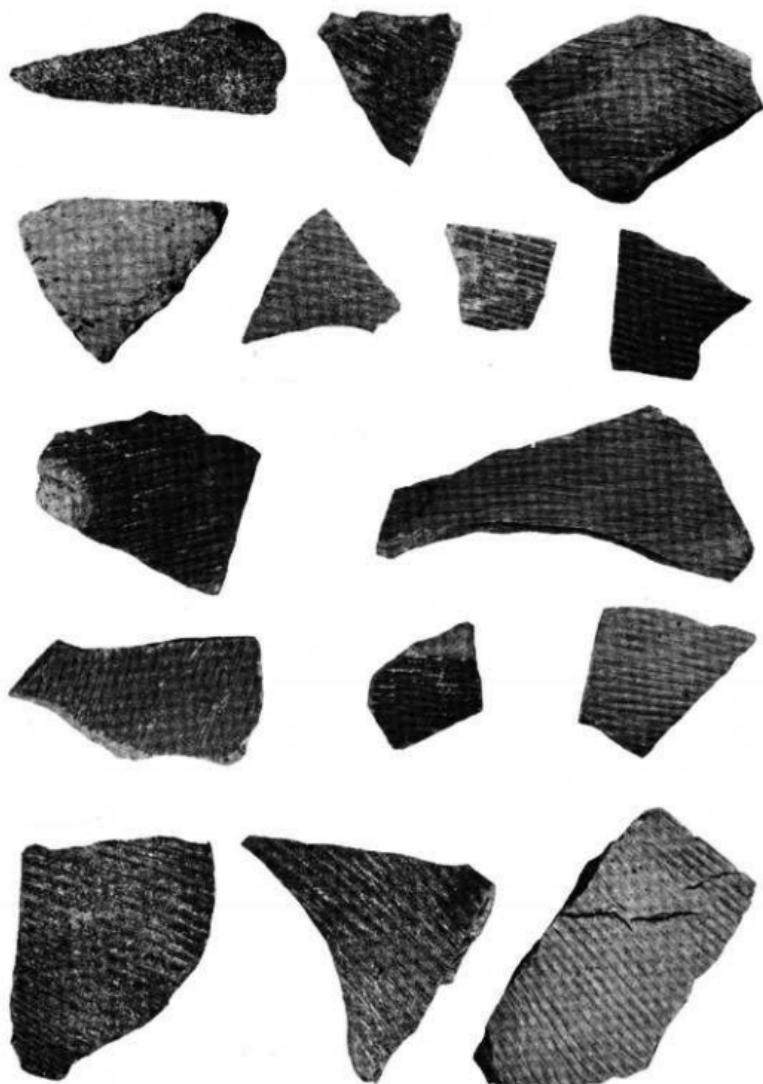
石器 上第1地点 下第2地点 (1/2)



珠洲系陶器 上第1地点 下第2地点



第2地点 出土珠洲系陶器



第2地点 出土株洲系陶器



上第2地点 出土陶磁器 下第3地点 出土珠洲系陶器

九塚調査前

図版  
19



九 塚

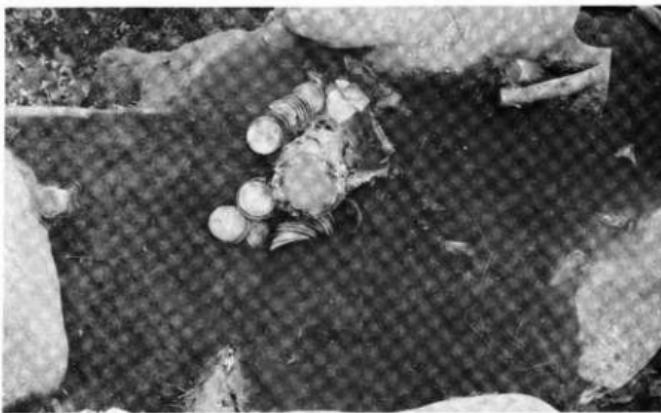
図版  
20



九 塚

図版  
21





石室状造構内  
出土の土師質小皿



灰 塚



調査風景

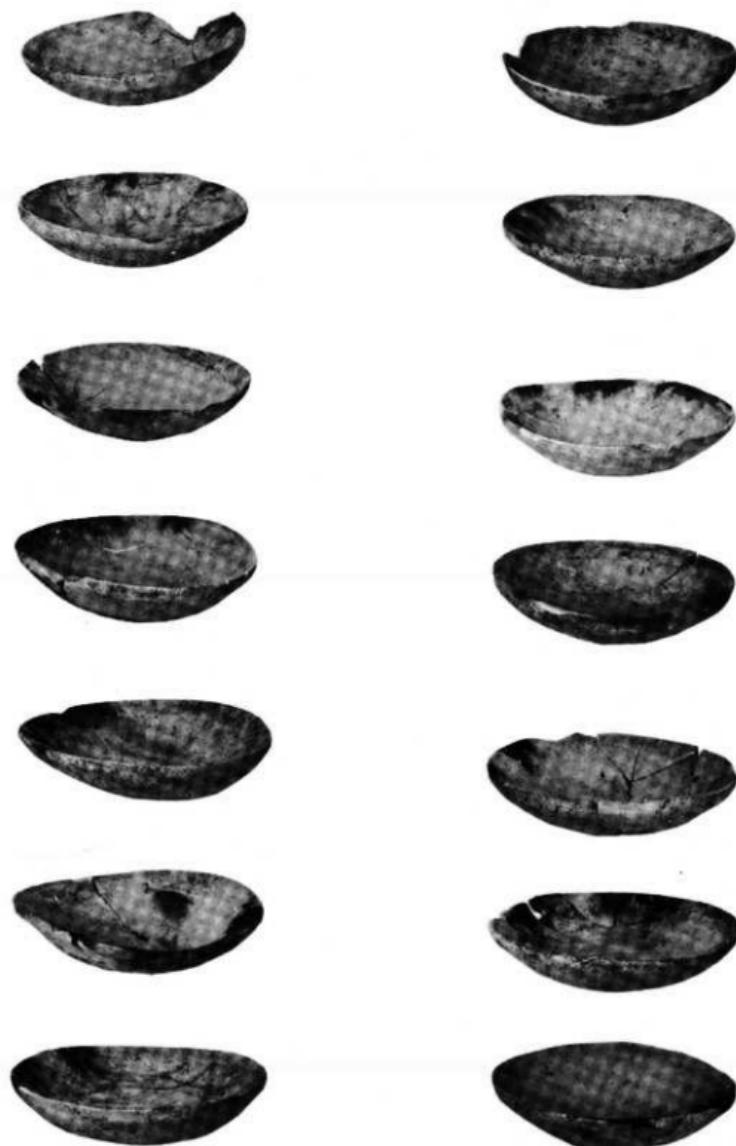


断 面





丸塚出土土師質小皿



九塚出土土師質小皿



九塚出土土師質小皿

魚津市埋蔵文化財調査報告書第14集  
富山県魚津市

本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和61年2月28日発行

発行 魚津市教育委員会  
〒937 魚津市駅前堂 1-10-1

